

三百年前、魔王を倒した勇者達は、人間界に点在する小さな国々を纏め上げ四つの王国を作り上げた。勇者アトロのレオデグランス国、戦士ラーデウイのパッセ国、僧侶プリシラのミルチア国、そして魔法使いサンダルクのサンダルク国がそれである。

建国者の理想図がそのまま国の方針となり、サンダルクは他国の追従を許さぬ強大な魔法大国となった。三百年経ったいまでもその方針は揺らぐことなく、軍の大半が魔法使いで構成されている。また、国民のほぼ全員が魔法の教育を受けて育ち、特に素質のあるものには華やかな出世の道が開かれた。逆に魔法の得意でない者に対しての扱いは酷く、場合によっては不当な虐待を受けることもあったが、現国王ユングが嚴重に取り締まり、少しずつ改善されていきつつあった。

前王バロンが急死し、ユング王（正式名はユング・ユルング・アートルノ・カイン・デ・フェーレイス・パロンディア・ママリア・サンダルク）が即位したのは、わずか十二歳のと

きだった。サンダルクでは国王が不在の時や精神・肉体的に執政が不可能な場合などに、変わりに元老院という機関が政治を行う権利を持っていたが、ユング王はこれを拒否する。ユングの王族としての自覚と国に対する思いは十二歳にしてすでに揺ぎ無いものであった。しかし、そうは言ってもやはりたったの十二歳。政治的実権を握ろうと企む元老院の議官たちは、幼く力無きユングを何度も自分たちの策略に陥れようとした。

そんなユングの危機を幾度となく救ったのが、彼に忠誠を誓う四人の優秀な部下達だった。王族に永遠の忠誠を誓う歴戦の老將軍シーグムンド、元老院議官でありユングの片腕である女傑スイートピー、妖精騎士の通り名を持つ若き英雄クーフリーン、そしてネッコの父親でありユング王に魔法教師として仕えるリジヨ・ヴァンシユタインである。

——サンダルク城。

サンダルクの広大な王の間。巨大なガラス窓からは暖かい陽光が差している。不似合いなまでに巨大な玉座にちよこんと腰をかけるのはブロンド髪と碧眼の美しく凛々しい少年。若き国王ユング・サンダルクその人であった。齢十五歳、即位して三年目にあたる昨今、ユングは独自の判断で法律の一斉改正を行っている最中であった。

重い音を立てて開くドア。ユングの法律改正にあたって、アドバイザー役であるスイートピーが、彼の書いた改正案をもって王の間に現れた。王の間に響く硬い靴の音、足取りは軽く、亜麻色の長い髪を薄絹のようになびかせる。スイートピーはユングの前に立ち止まると、軽く

おじぎをした。

「読んでくれたかスイートピー？」

ユングは喜々とした表情で言った。まだ声変わりすらしていないあどけない声色。

スイートピーと呼ばれた女性は、眼鏡のレンズの奥に潜む思慮深い瞳でユングをまっすぐに見据えながら言った。

「はい。できうる限り王の意向に沿うよう努力致しますが……」

「絶対にしてくれなきや嫌だ」

スイートピーの言葉を遮るようにユングは言った。

「はい、最善を尽くします。しかし、いくつか問題箇所がありました」

「どこだ？」

ユングが尋ねると、スイートピーは髪を書き上げ、改正案に目を落とした。

「まず、この売春禁止法についてですが……」

「うん、売春は全面禁止にしようと思う。そんな不潔な人間には我がサンダルクにいて欲しくない」

ユングは傲慢な顔つきで自分の意見を述べた。

「それにスイートピー、最近僕と同じぐらいか、それ以下の女の子にも売春行為が増えているそうじゃないか。可哀相に、国王として黙って見捨ててはおけないな」

「しかしユング王。ご存知の通り現在、魔王軍の影響で他国との交易が困難で、特に海路を

使つての貿易は完全にストップしています。お陰で我が国の財政状況はかなり厳しいものとなつており、街には仕事の無い人が溢れ返り、泣く泣く娘を売春に駆り立てる親も少なくは無いのです」

「だったら、魔王関係で職を失つた人に特別手当を出せばいいじゃないか」

「先ほども申し上げました通り、我が国にはもはやそのような経済的余裕がございません。その状況を打破すべく王が提案されました例の『贅沢禁止令』ですが、あれは王室の權威を落とす上に貴族の反感を買います。私としてはあまり賛成できません」

贅沢禁止令とは、スイートピーが述べた通りユングが財政難に立てた対策であり、不必要に豪華な装飾の禁止、式典関係の費用節減、税金を使つての不必要な建造物建設の禁止などが主な項目であつた。ユングは王族の生まれにしては珍しく、そういったものに興味を持たない性格だつた。

「ちえつ。だったら、やはり軍費の削減だな」

「もう削減できる軍費はありません。一般兵、魔法使いともに適正審査で厳選された人員以外は全て解雇しておりますゆえ、これ以上の戦力喪失は国防上、不安要素を残すことに」

「む……ならば……あれだ、ノーススターナイツ。他国に派遣しているサンダルクの支援兵をもう少しひっこめよう」

「それできません。ノーススターナイツはパッセ、ペルセンとの同盟を維持するための骨子ですから、あそこには一定数の兵を派遣している必要があります。我が軍の軍費を国営にまわ

すことができたのも、あの三国との同盟があるお陰ですから」

事務的なスイートピーの言葉を、難しい顔しながら聞くユング。

「……ああ、まったく！もうそのような弱音は聞きたくない！それをなんとかするのがスイートピー、お前の役目だろう？」

「はい、かしこまりました。それでは国費を不当に使っている疑いのある貴族、又は権力者のリストをリジヨ先生に調べてもらっておりますので、これを洗ってみましょう」

「うん、頑張ってくれ」

ユングのワガママな法律改正にあたって起こる不具合を解消するのは、全て彼の片腕であるスイートピーの役目だった。他国と同盟を結ぶために魔王軍を利用した例のノーススターナイツも、このスイートピーがサンダルクにおける自衛の不安を解消するために提案したものであり、ノーススターナイツの成立によって削減された軍費は、ユングが提案した貧民階級の子供に対する教育の充実に向けて宛がわれた。ユングも王として国民のことを考えてはいるのだが、その苦勞を一身に背負っているのは他でもない、このスイートピーという才女である。それでも彼女は愚痴など一つもこぼしたことがなかった。

「それで、次ですが……」

スイートピーがぺろりと改正案をめくった。

「まだあるのか？」

ユングが不満そうに言う。

「どうかご辛抱ください」

「嫌だ」

「陛下」

スイートピーがじっとユングの目を見つめる。それは責めるようなものでなく、また逆に懇願するようなものでもない。これが王の仕事だと、論すような目つき。

ユングも負けずにいじけたような視線を返すが、やがてぶいっと顔をそらす。

「あと一つだけだぞ」

「恐れ入ります」

そう言うと、スイートピーはさらにべらべらと改正案をめぐって、自分が訊ねようとした項目を発見した。人差し指で、眼鏡を心持ち押し上げる。

「この、強姦罪に対する罰則の改正ですが……」

「うむ」

「暴行又は脅迫、人の心神喪失もしくは抗拒不能に乘じ、またはこれをして心神を喪失せしめ、もしくは抗拒不能ならしめて女子を姦淫した者は、強姦の罪とし……」

スイートピーはそこで、おほん、と咳払いをした。

「強姦の罪とし、二年以上の有期懲役ならびに、局部切断の刑に処する」

スイートピーは問題の箇所（というより、元の文章にユングが書き足したのはその部分だけだが）を強調して言った。

「うむ」

「……間違いありませんか？」

「完璧だよ？」

「ユングは満悦の表情で言う。」

「……」

「再犯防止のためさ」

「スイートピーが困った顔をしているので、ユングも戸惑った。」

「……いけないか？女性に酷い仕打ちをする男なんかに、男でいる資格など無い」

「ユング王。王のお心は私にもよく分かります……しかし、先ほどの売春行為の禁止令とともに、少し性的束縛が過ぎるのでは……」

「……」

「確かに売春は風紀上好ましいとは言えませんが、民衆の反感を買わないためには多少のガス抜きというものも……」

「うるさいなあっ！」

「ユングはうずくまるように頭を抱えて、叫んだ。」

「どいつもこいつも金とか地位とか権力とか……女だ！」

「……ユング様！」

慌てて駆け寄るスイートピー。うずくまるユングの前で床に膝を立て、視線を同じぐらいの

位置にした。スイートピーは頭を抱えたままだ。

「不潔なやつらめ、なにがそんなに気に入らないんだ！どうしてもっと我慢できないんだよっ！」

「ユング様、どうかお気を確かに……」

「確かになんてできるか！助けてよスイートピー！僕はもう耐えられない、もう沢山だ！僕に王様なんてできないんだよっ！」

ユングの声がだだっ広い王の間に反響する。スイートピーは悲痛な面持ちで、そっとユングの肩を抱いた。ユングのか細い体は、よわよわしく震えている。こんな小さな体で巨大な国の王を任されたユングのそのプレッシャーを思うにつれ、スイートピーの心は我が身のように、いや、我が身以上にすぎずきと痛んだ。

「……どうかご辛抱ください。私たちが命に代えても、ユング様をお助けいたしますゆえ、どうかご辛抱を……」

スイートピーが論ずのを、ユングは黙って聞いていた。聞いているうちに不思議と涙がこぼれた。父にも母にも先立たれ、王として威厳を保たねばならぬユングが唯一涙を許す相手、それはこのスイートピーたった一人のみであった。

「……大人がみんなスイートピーみたいに素敵だったらよかったのに……」

ユングが呟く。スイートピーはまた少し強く彼の肩を抱きしめた。

ひと時の沈黙。王の間は、驚くほど静かだった。



………。

「ユング様アアー！」

そこへ、どかーんと無神経に開くドア。大きな体躯に真っ白の髪と髭を生やした、老人というには不必要に活力あふれる老人、シーグムンド將軍であった。執政権を握ろうと画策する元老院と戦う、ユングにとってもっとも信頼のおける部下の一人である。

以前、ユングの独善的な執政による経済難のため、給料を下げられた正規兵たちが異を唱えてデモを決起しようとしたことがある。そのとき、彼らを一喝して騒動を抑えたのもこのシーグムンド將軍で、彼の歴戦の功績と部下に対する人徳がなせる業であった。

彼の姿を見るなりスイートピーは慌てて佇まいを直し、何事かもなかったかのように振舞った。ユングは俯いたまま、しかし部下に涙を見せまいと瞼をゴシゴシとこする。

「むむむ……こ、これは失礼を」

そんな二人を見て状況を察し、シーグムンドは恐縮そうに大きな体を直立させた。

「いいえ……どうしましたか？シーグムンド將軍」

心持ち気恥ずかしそうな顔をしてスイートピーが訊ねる。

「いや、つまらん用事です。いつも城の中で塞がっているのは体に毒だと思い、たまにはユング様を狩りにでも連れて行って差し上げようと思ったんじゃが……」

「まあ、それはよろしいですわね」

スイートピーはユングの方に振り返り、彼の返事を待った。

「行かないよ」

そっけないユングの言葉。しかし、シーグムンドは食い下がらない。

「ユング様、そう言わずにたまにはどうですかの？若いうちに体を動かさなければ、歳をとってから辛うございますぞ」

「シーグムンドが言っても説得力に欠ける」

「わしは六十年間体を動かし続けてきましたからな。まだまだこれからですわい！がっはっはっは」

シーグムンドの大きな笑い声が王の間に響き渡る。

「さ、行きますぞユング様！クーフリーンの奴めも行きたがっておりますですし」

「行きたがるも何も、クーは誘えば嫌って言わないだろ」

「がっはっはっは」

やれやれ、といった表情のユング。

「ユング様、行ってらしては？シーグムンド將軍はユング様と行きたいのですよ」

「……はあ。分かってるよ」

ユングはそう言うのと、王座から大業そうに腰を上げ、大きく伸びをした。嬉しそうにするシーグムンド。

「うむ、そうこなくては！ではスイートピー殿、あとを頼みますぞ」

「お気をつけて」

「サンダルーク城、第三連隊兵士訓練所。数少ないサンダルークの白兵部隊である。大勢の兵たちが剣技を磨きあっているのを、一人の少女が見回っていた。短く切りそろえた雪のように白い髪に印象的な赤い瞳を持つ、インキュバスと人の間に生まれた子。第三連隊長であり妖精騎士と謳われるクーフリーンである。

「とりやあ！」

一人の兵士が掛け声とともに木刀を打ち込む。

「甘いっ！」

相手の兵士はそれをかわし、最初の兵士の小手に厳しく打ち込んだ。

「ぐあっ！」

かなり力が入っていたのか、腕を打たれた兵士は木刀を落とす、苦悶の表情を浮かべてうずくまる。

「あー、いてててて……」

「あ……痛そう」

それを眺めていたクーフリーンが眩き、眉をひそめた。

「大丈夫？いま救護班を呼んで来るね」

彼女の言葉に、腕を打たれた兵士は笑った。

「はは。隊長、こんななんでも無いですよ」

「相変わらずお優しいというか、甘いというか……」

二人の兵士に逆にたしなめられ、クーフーリンは頬を赤くした。

「う……でも、これは練習だから、あまり熱くならない方がいいと思うよ」

「気をつけますよ」

およそ軍隊には向いていない性格の、このクーフーリンという少女。しかし、その実力は折り紙付きで、十七の時に入隊して以来わずか二年足らずで連隊長の地位を任されるに至った。

本人が望めば將軍の地位も夢では無いのだが、彼女自身は出世に興味は無いらしい。

インキュバスと人の子は大体が醜く生まれる定めにあるが、ごく稀に秀でた器量を持つ者が生まれることもある。クーフーリンもそのわずかな例の一人であった。特徴的な白い髪と赤い瞳は酷く目立ち、周りからの奇異なものを見る目は自分がインキュバスの子だということを嫌でも思い知らされるものだが、彼女の謙虚な性格とその実力のお陰か、周りから差別や嫌がらせを受けたなどという話は全く聞かない。むしろ、彼女の整った顔立ちと相まって、神秘的な魅力を醸し出しているほどであった。

クーフーリンが訓練指導（実際は怪我をしないか心配で見回っているだけ）を続けていると、そこへシーグムンドとユングが現れた。かの名將軍と王の登場に、クーフーリンは踵を揃えて彼らを迎え、兵士たちの間にも今までになかった緊張感が走る。

「うむ、やっておるな連隊長」

「おはようクーフーリン」

シーグムンドとユングが言った。

「おはようございます、陛下にシーグムンド將軍」

突然の訪問に戸惑うクーフーリン。

「えっと……用向きの程は？」

「なに、これから王と狩りに出かけるところでな。お前も来ぬか？」

「え！私もよろしいのですか？……あ、でも……」

クーフーリンは一瞬嬉しそうな顔をしたが、ちらりと後ろを振り返り、訓練を続ける部下の姿を見た。彼らをほったらかして自分だけが狩りに出かけるわけにはいかない。しかし、せっかくの將軍と王の誘いを断るのも気がひける。

「……うー……えっと、その……」

「……ほら、シーグムンド。クーは困っているじゃないか」

ユングが言った。

「そうは言ってもユング様、クーフーリンが居ると大物が獲れますぞ。こやつ程の腕の持ち主はそうそうおらんわい」

「訓練中なら仕方ないよ。狩りの得意な者なら……たしか、第一連隊のエリックとか」

「エリック……ふん。わし、奴は好かんのです。元老院議員リンボアの息子でしてな。實力は

あるのだが、なにかとつけあがるところなんか父親そっくりだ」

「エリックさんは確か、レオデグランスの勇者募集に行きましたよ」

クーフリーンが言った。

「だったら、この国で狩りらしい狩りをできるのはクーフリーン、お前しかおらんわい。わんさかという魔法使い連中を連れて行っても、獲物を黒焦げにしてしまうだけだからの！」

「……うーん。でも……」

一人の兵士が悩んでいるクーフリーンの元へ駆け寄ると、シーグムンドとユングに敬礼をした。

「隊長、どうぞ行ってきて下さい。あとは私が引き受けますよ」

「副隊長、でも……」

「たまには隊長抜きで訓練しなきゃ、俺たちの腕も鈍っちゃいますしね」

「うん……え？どうして？」

クーフリーンが訊き返すと、たちまち兵士たちの間に笑い声がおこる。

「さ、行くぞクーフリーン。よもや、王の誘いを断ろうというのではあるまいな？」

（一方的に誘っているのはシーグムンド、お前だろう……）

ユングは思った。

「うう……ずるいですよ、シーグムンド將軍」

「がっはっはっは。お前は腕の程は確かなのだが、どうしても主体性や決断力に欠けるな。そ

れさえなければいつでも將軍の地位を任せるものを」

「クーはそういうの、望まないよね」

ユングが言うと、クーフリーンはまた悩みはじめる。

「はい……………あ……………えっと……………すみません……………」

「……………？別に謝ることはないさ」

高い地位を望まないことが、忠誠心に問題があるとしても思ったのだろうか。ユングは、もし自分がクーフリーンのような性格だったら、きつと気苦労が絶えないだろうなと思った。

「さて、目指すは南の森！あそこならデツカイ獲物が獲れるわい」

——ヴァルレー大石橋。

ミルチアとサンダルクの海路を跨ぐ大石橋を渡るのは、ミルチアから亡命してきたエーデルリッターの大隊、それにロア、メルフィナ、ネッコ、エレイン、ライオネル、アムリタ、リュネット、加えてロットとそのパーティ、ガウエイン、ルーシィだ。

魔物が大量に巢食ったこの橋を渡るのは大業を極めた。朝から晩まで襲い掛かってくる魔物との戦いは途方も無い疲労と犠牲を伴い、特に、魔物の時間でもある闇夜の時間は皆が恐怖に打ち震えた。最小限の休憩と睡眠で突破したいのは山々だったが、続々と出てくる負傷者や疲弊しきった兵たちのことを考えると、そうもできなかった。このまま橋を渡りきることができ

るのだろうか？例え渡りきれたとして、いったいどのくらいの人員が生き残るのだろうか？まとめ役のコーディネリアは、焦りを隠せない様子だった。

橋を渡り始めて三日目の朝。夜中が過ぎれば魔物の攻撃はやや落ち着いたものになる。兵たちは安堵を覚えながら、黙々と歩きつづけた。

「……」

ふらふらと危なっかしい足取りのアムリタ。

「おいおい、しっかりしろよ。落っこちてもしらねえぞ」

傍を歩いていたロアが言う。アムリタははっとして頭を左右にふり、意識を保とうとした。

「……っ」

しかし、気を許すとすぐにも足元がふらつき、視界がぼやけて見える。おまけに万力で締め付けられるかのような酷い頭痛が彼女を襲った。

「う……」

「……おい、マジに病気か？ミルチア城の時から調子悪そうだったけど……」

ぼんやりと焦点の定まらないアムリタを見て、ロアが心配そうに言った。

「……べつに……」

そう言った瞬間、アムリタは石橋の上でどさりと前のめりに倒れた。周りは騒然とする。

「お、おい！」

アムリタは朦朧とした意識の中、周りが騒ぐのを他人事のように見ていた。心配そうに覗き



込むロア。自分よりも随分後方にいたネッコとエレインが、兵士たちの列をかきわけてやってくる。

「あ、アムリタ！大丈夫か？」

「アムリタ！」

二人の声も、アムリタの耳には遠く聞こる……ネッコを押しつけるようにしてエレインがアムリタの体を抱きかかえると、そっとしておくようにネッコが言った。エレインは分かっていると、言ってもう一度アムリタの体を寝かせる。

「ネッコ、回復魔法はどうしたの！」

エレインが声を荒げる。

「回復魔法だったって、どこも怪我をしていない。意味がないよ」

「役立たず！」

「むかつ。随分ですね！」

目の前で口喧嘩をする二人。うるさいな……アムリタは心の中でそう呟いた。いつの間にか二人はこんな喧嘩をするようになったのだろうか？アムリタは考えつづけた。

(……特に……私のことになるとエレインは躍起になる。あの女王様は、どういうわけかこの私に……一種の……好意を感じている。不思議ね、他人に好意なんて到底もち得ない私が、誰かに好かれるなんて……)

一瞬、アムリタの脳裏にフラッシュバックする、ゼム・ロックの顔。

(……あの人はいま、私の帰りを待っているのかしら……娘として？道具として？……馬鹿馬鹿しい、答えは決まって……)

突然、強烈な頭痛とともに、視界が真っ赤に滲む。

「きゃあああああ！」

エレインが叫び声を上げた。アムリタの左眼……即ち、悪魔の瞳から真っ赤な鮮血が糸をひく。

「ア、ア、うわ、ア……アムリタ！これは……」

ネッコが自分のハンカチでアムリタの頬を伝う血の涙を拭いた。ぬるっとした感触が生々しい。

「くっ……時間がないわ……」

アムリタがポツリと眩くと、ネッコはハツとした。

(肉体融合の禁術は……被術者の寿命を縮める！そうだ、この子は……もう幾許の命も無かったんだ。いまごろ思い出すなんて……)

アムリタはネッコのハンカチを手にとり、自分の目に当てると、ゆっくりと体を起こした。動かない方がいいと声を荒げるネッコには目もくれない。

「……ルドヴィヒの孫」

アムリタは余所余所しい呼び名でネッコを呼んだ。

「私がどうしてあなたにコンタクトを取ったか、ラクシュミ教会に行けば分かるわ」

「ラクシユミ教会……」

「そこにあなたの母……私たちの母がいる」

「母さんが？」

「母に会いたい？」

「もちろんさ！」

「その人が母親の役目を到底成し得なくても？」

アムリタの意味深な言葉に、思わずネッコはきよんとした。彼女の言葉の奥には、不穏ななにかが漂っている。

「……それって……？」

「……それを知れば、あなたは私が何をしようとしているのか、分かるはず。いえ、私が何をしようとしているかなんて、察しはついているけど、ただ信じられないだけかもしれないわね」

「知らないよ、そんなの」

（とにかく……それまでこの体がもてばいいんだけど）

その傍らで、エレインは黙って二人のやり取りを聞いていた。ネッコとアムリタが兄妹であること。自分と違って、二人に母親がいたこと。その二つの事実は、エレインを急に孤独にさせた。そっと俯き、顔に影を落とす。

（馬鹿ね、私。アムリタには母親がないなんて……自分と同じだなんて、勝手に決め付けて

た)

同情をもって共感していた友人、アムリタ。しかし、同情に似た感情を受けるのはむしろ自分の方だと知り、エレインは惨めな気持ちになった。腰に備わるエクスカリバーの柄をぎゅっと握る。

(……それなら……アムリタ、私を拒絶しなさいよ……!)

ブラックナイツ隊、コーデリアの元に、ロットが現れた。

「……どうなされました？ロット殿」

コーデリアが訊ねると、ロットは気の重そうな顔つきで答えた。

「私達は……やはり、ここを渡れません。私がついていくと、コーデリアさん、あなた方に迷惑をかけることになる」

ロットの言葉の裏を、コーデリアは察した。

「……王殺しの汚名を着せられているからですか」

「ええ」

コーデリアは薄く笑うと、ポン、とロットの肩に手を置いた。

「安心なさい。私はアルテオムによって、すでにクラモリ王殺しの汚名を着せられていますよ」

「なっ……」

ロットは驚愕した。そして、無様な自分の失態を一層深く恥じた。

「……面目ないっ！」

頭を深々とたれるロット。野次馬根性をくすぐられた兵士達が、何事かと覗き込む。

「顔を上げてくださいロット殿。アルテオムが即位することになった時点で、いずれはこのような運命だったのです。王殺しの汚名など、ただの口実に過ぎませんよ」

「しかし……コーデリアさん。王殺しとなれば、ただの謀反とは訳が違います。そんな連中をかくまうリスクは案ずるまでも無いというもの。果たして、サンダルークは我々を受け入れてくれるでしょうか？」

「……まあ、それは」

コーデリアは遙か前方に目をやって、胸を張って言った。

「なんとかなりますよ。天に全てを任せましょう」

コーデリアの樂觀的とも言える言葉に、ロットの胸中は複雑だった。

（どれもこれも危ない橋だが……選ばざるを得なかった選択だ。そして、一度選択したからにはそれに全てをかける。リーダーとして、コーデリアさんはわざとこんな風に振舞っているんだろうな。自信なんてかけられないのに……）

ふと、後ろで不安そうにロットを見つめるルーシィの姿が彼の目に映った。ガウエインも大きな体に似合わず、心配そうだ。二人のパーティメンバーを眺めて、ロットは思った。

（……すまないな、僕みたいな頼りないリーダーのせいで、こんな目に合わせて……）

ふふ。きつと、僕には向いてなかったんだな)

ロットは二人から顔をそらすと、とぼとぼと俯きながら歩きつづけた。

「……ロット殿、お辛いでしょうな」

ガウエインがロットの背中を見て呟く。

(……頑張れ、ロット様、頑張れ……真の勇者様！)

心の中で念仏のように唱えるルーシイであった。

第一ミルチア城からそう遠くない無人の荒野。そこに奇妙な生き物がいた。いや、それを生物と呼んでいいものか。それは人の姿をしていた。人と違うのは胸から下が無い事だ。おまけに片腕も無い。その男はポールスだった。口から絶え間なく赤い血と苦痛の呻き声を洩らしながら、一つしか残っていない腕で体を引きずっていた。この体で生きていることも、第一ミルチア城から脱出してきた事も信じられないことだった。

「あははははははっ、酷いざまですね、ポールス様」

いつの間に現れたのか、ポールの前に一人の少女が立っている。空のように青い髪。その髪についた大きな赤いリボン。真っ黒の子供用のドレスを着ていた。かつて十三使徒ヘンギストが作り出したホルムンクス、体の中に六百六十六匹の魔物を飼う魔族だ。

「……ルーテネか……」

ポールスが息も絶え絶えに声を出す。

「あーあ、十三使徒ともあろう方がこんなにこっぴどくやられちゃって……しかし、よくそんな姿になっても生きてられますね。おまけに傷も回復してきている。これもポールス様の長年

の研究の賜物ですかね」

ルーテネがボールスの姿と見て甲高い声で笑う。ボールスが憎悪に燃える目で睨んだ。

「……ルーテネ、モードレッドの命で私を殺しに来たのか？」

ルーテネが驚いたように目をぱちくりとさせ、すぐにまた口を大きく開けて笑い出した。

「モードレッド様？ きやはははは、まだなんか私のこと勘違いしているようですね。しかたない……」

ルーテネがそこで言葉をきる。

「……この声でも思いませんかな、ボールス」

ルーテネの口からしわがれた老人の声が発せられる。幼い少女の姿のルーテネからは想像も出来ない声だ。

「……貴様、ヘンギストか」

ボールスが歯軋りさせながら呻いた。ヘンギスト、三百年以上も前に勇者アトロに倒され死んだとされる十三使徒だ。優れた錬金術師としても知られる。ボールスとは同じ錬金術師同士のライバルと喋っている関係だった。

「まあ、半分は正解ってところか。もっともヘンギストと呼ばれた遺伝子はもうこの世には一片も残っておらんだろうが」

「……」

「この肉体はヘンギストではない。だが私はヘンギストと呼ばれた男の一部だ。ふふふ、判ら



んという顔をしておるな」

ルーテネ、いやヘンギストがしわがれた声で笑った。

「ヘンギストが勇者アトロに倒される直前に私は研究を完成させていたのだよ。貴様のとは違う私の不死の研究がな」

「……貴様の不死の研究だと？」

「そうだ。貴様は己の肉体をより優れたモノへと進化させ続け、それによって不死を得ようとしていたようだが、私に言わせればそんなものでは本当の不死など得られんよ。私の研究は貴様のなどとは根本的に違う。大体貴様は生命とは何だと思う？」

「……」

「貴様が生命と考えていたものは肉体だろう。だが私は違う。私は肉体などに執着はしなかった。私が生命の本質と考えたものは記憶だ。記憶とは突き詰めればただの脳内信号、つまりただの情報だ。そしてすべての情報は0と1の二進数で表現できる。ヘンギストは己の記憶のデジタル化に成功したのだ。そうして死の直前に自らが作り出したホルムンクス、ルーテネにその記憶をダウンロードしたのだ。今の私は正確にはヘンギストでもルーテネでもない。二つの人格が混ざって出来た新たな人格だ。もっともヘンギストと想ってくれても問題はないが」

「……ふん、何かと思えば馬鹿らしい。記憶が生命の本質だと？」

「そうかな？ 考えてみる。もし今貴様の記憶が綺麗に消えて、代わりにヘンギストと呼ばれる男の記憶がそっくりそのまま入ったらどうなると思う。貴様は自分の事をポールスなどと思う

か？」

「……だが、周りはその私をボールスと呼ぶだろう」

「かもしれない。しかし、周りがそう呼んだからなんだというのだ。私を私たらしめているのは私の意識における私という認識だ。私が認識するから世界は存在し、私も存在するのだ。私の意識が消えれば私の世界も消える。その万能の意識が君自身をヘンギストと認識したら、君はヘンギスト以外の何者でもない」

「……詭弁だな」

「結果はもう出ている。同じく不死を目指した二人の内、一人はもうすぐ死んで全てが消え、もう一人は遙か昔に肉体は滅びはしたが意識としては存在している。どちらが優れているかは一目瞭然だろう」

「……」

「このルーテネは生物としては非常に単純な造りで出来ている。人間よりアメーバなどに近いと言ってもいいくらいだ。もっとも遺伝子レベルで見ればの話だがな。単純な分、複製も簡単だ。人間やその他の哺乳類に比べて遥かに短い間隔でコピーという名の自分とまったく同じ記憶と遺伝子を持った子孫を残せる。私の記憶を持った私がいくらでも増える。これこそ私の求めていた不死だ」

ヘンギストが笑った。

「……だが、欠陥があった」

ポールスが苦しみを抑えて、顔に笑みを浮かべて言った。ヘンギストの顔から笑みが消える。「……さすがにするどいな。その通りだ、今の私には致命的な欠陥がある。コピーを作る際にわずかに記憶情報が劣化してコピーされる。こればかりはどうしようもない。情報を肉体という物質に乗せている以上、完璧な複製など物理的にありえないからな。少しの情報の劣化なら問題は無かった、生命とは絶えず変化するものだし、一回の複製の際に生じる劣化程度なら人格や記憶にもそれほど影響は無い。しかし、コピーを重ねれば重ねるほどその劣化が無視できなくなってきた。記憶障害や人格変化どころか肉体の生命維持にも問題が出てきた。最近の私のコピーにはまともにも動かないものも多い。だが、その問題ももうすぐ解決される」

ヘンギストが笑った。気味の悪い笑いだ。

「貴様の研究は見せてもらったよ。時々貴様の研究室に黙って入ってね。さすがに私と並ぶ錬金術の天才と言われた男だ、中々興味深い研究をしていたな。特に興味を持ったのは貴様が最も力を入れていた研究、勇者の遺伝子と魔王の遺伝子の結合だ」

「……ふん、私はその研究に力を注いでいたのは百年以上前だ。いくら待っても魔王モートは復活しなかったし、他にモートの遺伝子など何処にも残っていないなかったのでね」

「きやははははは、モートの遺伝子が無いですって！」

突然、ヘンギストのしわがれた声からルーテネの幼い女の子の声が変わった。腹を抱えて高笑いし続けるルーテネ。

「……失礼。最近、どうも人格が安定しなくてね」

ヘンギストが笑い顔から真顔に戻っていった。声もヘンギストのものに戻っている。

「……あるのか？モートの遺伝子が？」

ポールスが金色の目を輝かして聞いた。

「ああ、あるとも。我々の身近にな。もっとも十三使徒の中にもこの事を知っているものはいないだろうがな。そして……」

ヘンギストが懐から一本の試験管を取り出した。中には血が入っている。

「勇者アトロの子孫の血も手に入れた」

それはポールスが研究所に置いておいた筈のエレインの血だった。

「貴様の研究が完成すれば勇者も魔王も超える最高の肉体ができる。その肉体があれば私はコピーを作るのを最低限に抑えられる。貴様が研究していた不滅に限り無く近い肉体と、私が完成させた例え肉体が減んでも記憶を移せる技術。この二つが合わさればまさに不死とは思わんかね」

「……」

ポールスは顔を伏せている。

「貴様の研究はまだ完成していないようだが心配するな。貴様を殺した後、私が完成させてやる」

「……くくくつ、わーははははっ」

ポールスが突然伏せていた顔を上げ、顔を仰け反らして笑い声を上げた。口から血が飛び散

る。

「そうか、あったのか。モートの遺伝子が。これほどうれいことはない。それに貴様が私を殺すだど。生前も十三使徒最弱と呼ばれ、死んだ今では下級魔族の肉体にしがみついている貴様がか？笑わせるな！」

ボールスが残った片腕で地を蹴った。ボールスの体が空中を飛び、恐ろしいスピードでヘンギストに向っていく。ヘンギストの体が粘土の様に変化をみせる。ヘンギストの小さな肩から大きな獅子の顔が生まれる。しかし、それが出来上がるより早く、ボールスがヘンギストめがけて腕を振り下ろす。ボールスの掌がヘンギストの頭を粉々に砕いた。血と肉片が飛び散る。頭を失ったヘンギストは倒れて、体がピクピクと痙攣している。ボールスは片手でうまく着地した。上半身と片手だけでよくこんな超人的な動きが出来たものだ。

「ふふふ、下級魔族か。ちよつとシヨックだな。これでも昔のヘンギストよりは強いんだけどな」

側の岩場からルーテネがちよこんと姿を現した。

「コピーならいくらでもいるって言ったでしょ」

笑ってそう言うルーテネ。岩場の影からはどんだんルーテネが出てくる。合わせて五十人出てきたルーテネ達はボールスを取り囲んだ。百の瞳が地面に這いつくばっている惨めなボールスを見つめる。

「みんな私よ。どう面白いでしょ？」

五十人のルーテネが一斉に喋る。一人のずれもない完璧に合わさった声だった。ボールスがルーテネ達を見上げ、低い唸り声を上げた。金色の瞳が爛々と光る。

「バイバイ、ボールス」

五十人の中の一人が寂しそうな笑みを見せて言った。

四十九人のルーテネが一斉にボールスに飛び掛る。ボールスが叫び声を上げたがその姿はルーテネが山の様に重なって見えない。叫び声はたつぷり三十秒は聞こえたが、やがて消えた。一本も残っていないかった。水溜りのような大量の血だけが、ついさっきまでそこにボールスという男が生存していたという事を語っていた。血に塗れたルーテネ達は互いに一言も話すことなくバラバラに何処かに立ち去った。

ただ一人、ボールスに襲い掛からなかったルーテネだけがその場に残っていた。北からの冷たい風が吹きぬけ、ルーテネの青い髪を揺らす。ルーテネは立ち尽くしたまま遙か北を見つめていた。

トウオンがしかめ面をして机に向って書類の束に目を通していた。どれも不快な戦況ばかりが書かれている。大方の予想どうりモードレッドとの戦いはトウオンの劣勢だった。なにより兵の総数からして違いすぎる。トウオン軍と比べてモードレッドの軍は三倍近い戦力差があった。

部屋の扉が開き、メレアガンスが入ってきた。彼の黒い鎧は血に塗れ、全身から只ならぬ殺気が漂っていた。戦場からそのまま駆けつけてきたのだろう。

「ご苦労。どうだ？」

「前線の砦はなんとか保っている。敵の大幅な増援でもない限り、しばらくは落ちんだろう」  
メレアガンスが椅子に腰を下ろし、一息ついて言った。

「それより気になる報せが来た。まだ未確認で事実かどうかはわからないが、ボールスが死んだ  
そうだ」

「なんだと！」

トゥオンが椅子から立ち上がった。それが事実ならこの数百年、魔界を支配してきた支配者の一人が死に、魔界の勢力均衡は大きく動くことになるだろう。なによりボールスはモードレッド派、トゥオン達にとっては敵の戦力が大きく減少したことになる。

「今すぐボールスの領地に兵を動かそう。今なら簡単に奪い取れる」

「待て。動くのはもう少し確実な情報を得てからだ。ボールスが人間に倒されたという話を簡単に信じることはできません」

「馬鹿な！人間に倒されただといつたい誰にだ？」

「倒したのはエレインという者とその仲間達だそうだ。場所はミルチア。ボールスがそんなところで何をしてたかは知らんが……エレインという者はあの勇者アトロの末裔だ」

「勇者アトロ……」

トゥオンが呟いて、椅子に腰を下ろす。顔に両手を当てうな垂れ込む。

アトロ……トゥオンにとってなんと呪われた名前だろう。かつて魔王モートが勇者アトロによって倒された光景がトゥオンの頭に浮かぶ。十三使徒の中でもモートの親衛隊の隊長の任だったトゥオンはその時モートのすぐ側にいた。この数百年、あの時の光景が瞼から離れない。自分はある時、モート陛下共に死ぬべきだった。しかし、死ねなかった。運命はトゥオンに安楽な死を与えず、残酷な生を与えた。モート陛下を守れなかった自分。主君が死んでも生き延びている自分。罪悪感に苛まれる。

「その報せはどうやって手に入れた？」

トゥオンが顔を上げて言った。

「報せに来たのはルーテネという魔族だ。おまえも知っているだろう。あのヘンギストの所の、幼い少女の姿をした者だ」

「あいつか……あいつは今もモードレッド派のはずだろう。それがなぜ我々にそんな重要な情報を与える？信用できない……やはり罠か」

「かもしれない。私が真相を確かめてくる。そのために前線から離れてきたのだ。私が戻るまで前線での指揮はおまえが取ってくれ。私はボールの居城、ネグロードに行ってくる」

「一人でか？危険だぞ。罠だったらどうする？」

「心配いらん。すぐに戻る」

メレアガンズはそう言うのと、トゥオンの部屋から出て行った。



メレアガンスが馬に乗る。巨大な体躯と漆黒の美しい毛並みを持つ『荒風』という名の馬だ。魔族の血が入った馬、一日に千里を駆けるとも言われている。もう何百年もメレアガンスと共に戦場を掛けてきた。

冷たい風がメレアガンスを打つ。荒風が低く嘶いた。メレアガンスが空を見上げる。夕焼けが厭に赤かった。今年はいつもそうだ。そして、魔王モートが死んだ年もそうだった。メレアガンスは荒風の背を撫でると、たずなを握って馬を走らせた。

「どうということだ？」

すでにエーデルリッター大隊一向がヴァルレーを渡り始めてから四日目の昼のことであった。コーデリアは現在の状況を訝しげに思い、そう呟いた。

一向が最後に魔物を倒してから二時間、前進を進めようとも魔物は一切姿を見せなかった。

「なにかの罠か？ いや、魔物如きにそのような作戦がとれるはずがない……」

そう思案に入ったコーデリアに先行しているブラックナイツの兵から報告が入る。疲労しきっているエーデルリッター各隊を順に交代させながら進んでおり、現在はコーデリア率いるブラックナイツが先行であった。

「一騎接近してきます。正体不明。もうすぐに先陣の兵と接触します」

「何？一騎だと？魔族、いや使徒か？私がいく、皆には手を出させるな！それとともに後方へ連絡、ライオネル殿、ロア殿を呼んできてくれ」

そう兵に捲くし立て、コーデリアは馬を先陣へ向け、かけ始めた。

ブラックナイツたちの間をすり抜け、隊の最先端まで駆けたコーデリアが見たものは、確か

に一騎、巨大な馬を駆る剣士であった。その姿、表情は頭からすっぽりと被ったマントで窺い知れない。しかし、その姿がはつきりと見える程まで、その一騎は接近していた。

「……魔物の次は、騎士か」

その一騎が呟いた一言はコーデリアの耳にはまだ届く距離ではない。

「何者だ！」

魔物の出現もなくなり、静けさが支配したヴァルレーの上を、コーデリアの凜とした声が響く。

「……」

相手の返答はない。コーデリアは意を決し、剣を鞘から引き抜く。

「我が名はコーデリア・レキ。エーデルリッター、ブラックナイト隊長」

そう朗々と名乗り、隊から進み出る。得も知れぬ気迫がコーデリアを包んでいる。

対する一騎も背に背負った長剣を抜き、少し早い速度で前に出る。

「名乗らぬのか？それほど卑しい者なのだな」

相手に向かい、挑発の言を飛ばすコーデリア。

「……アヴァウッド・キャメロン」

相手の一騎はそう小さく呟く。

「アヴァウッドか、心に刻もう、今ここで尽きるその名を！」

そう宣言し、コーデリアは馬を駆けさせる。吸血馬であるその愛馬の脚は強烈、彼女の剣閃

は熾烈。見守るブラックナイツの誰もが一撃、しかも一方的に決まるであろうと思っていた。

しかし、辺りに響く剣と剣が触れ合う金属音。そして舞う火花。

熾烈な一撃を、相手の剣士は見事に回避してみせる。

それだけではない、あの隊長と斬り合っているのだ。

激しく斬り合う二騎。一撃一撃が確実に必殺の一撃である。

兵たちの驚きはもう一点にも集中した。二人の馬上の達人を支えるその馬たちである。

コーデリアがああ黒馬を駆りだしてから、競り合いになると、下の馬が持たないのだ。それはそうであろう、吸血馬の力にかなう馬などいるわけではない。それがブラックナイツたち共通の意見であった。

しかし、相手の剣士の馬は、その力に引けは取っていないのだ。どちらかと言えばコーデリアの馬の力のほうが上回っている。しかし、渡り合っているのだ。

「…やるな」

「貴公もな」

競り合いながらそう言葉を交わす二人。剣閃の応酬はさらに過酷さを増していく。

先陣で騒ぎが起きている。それに中陣、後陣が気づき始めたのが、コーデリアが剣を交え始めてすぐのことであった。

「何が起こってるんだ？」

先の方を見つめ、ネッコがそう声を上げる。

「また魔物ではないですか？」

ネッコの隣でメルフィナがのんびりと言う。

「またですか…早くこの橋を渡ってしまいたいものですわ」

ネッコとメルフィナの後ろでエレインが不満そうに呟く。

「エレイン様、そうおっしゃらずに」

さらにその後方でライオネルがエレインをなだめている。

「なんだか楽しそうだな。やっぱりじっとしてるのは体によくない」

体が疼くといった感じでネッコたちの前のロアが言った。

「……」

ライオネルの横で馬を進ませているアムリタはわれ関せずという感じである。

「そう言っただけで逃げないでしょうね」

そう言っただけでロアを横から睨みつけているリユネットであった。

ロアが宣言どおりに前方へ進もうとしているのをメルフィナとリユネットが止めようとして

いるところで、兵からの報告が彼らに届く。

「前方に正体不明の剣士が一騎現れ、現在コーデリア隊長が応戦中。ライオネル様、ロア様に

至急先陣への報告です」

そう報告され、ロアはほら見ろといった表情を取り、ライオネルに顔を向けた。

「コーデリア殿は相手が使徒ではないかとお考えのようだな」

「へへへ、面白くなってきた」

「エレイン様、しばらく留守に致します」

「わかりました。しっかりお役目を果たしてきなさい」

そうライオネルの申し出をに姫たる態度で応じるエレイン。

「はっ」

そう短く答えるライオネル。

その横で、

「じゃあ先に行くぜ、ライオネルさんよ」

そう満面の笑みで馬の上に片足をかけているロア。

「リユネット、馬を頼んだぜ」

そう一方的に言い残し、ロアはそのまま脅威の身体能力により、あっという間に見えなくなった。

コーデリアと剣士の剣舞は激しさを増していた。

しかし、激しいながらも拮抗しているのか、お互いに全く傷ついていなかった。

さらに一合斬り合って距離を取りながら、コーデリアは自分と相手の差を内心で思い立っていた。

コーディネリアが肩で息をし始めたのに対し、相手はまだその動作が見られない。それは男と女の体力差であるかもしれない。しかし、コーディネリアは剣技の差であると確信していた。

「この男、アヴァウツド……強い」

そう内心で思っていた。

相手がまた剣を構えなおし、距離を縮めてくる。

一息吸い直し、構えるコーディネリア。

そのとき、頭上から声が降ってくる。

「手助けしにきたぜ」

大音量とともに、橋の石畳に着陸したのは、ロアであった。コーディネリアにかけた声はなんとも緊張感のないものであった。

振ってくるロアに注意して距離を取った剣士に向き直るロア。

「さくて、いっちゃやったる……」

その剣士をまっすぐ見やったまま、ロアの言葉は尻つぼみになっていく。

「どうしたロア殿！まさか、やはり使徒なのか！？」

ロアの異変に、恐れていたことが事実なのだと確信するコーディネリア。慌てて軍を指揮しようとする。

「ちよい待った！」

しかし、ロアから待ったがかかる。

「なっ何をする！」

コーディネリアが声を荒げたのは無理もない、ロアに首根っこを捕まえられ、つんのめったからである。

「ああくあのさ……」

ほほを掻きながらロアは歯切れ悪そうにしている。

「なんだというのだ」

そんなロアに詰め寄るコーディネリア。

「ちよっと見ない間に」

そんな言葉を聴き、そちらを向いたコーディネリア。

剣士が十分にその剣の間合いまで接近していることに驚愕する。

「しまっ！」

その声を上げながら柄を握ろうとするコーディネリア。

しかし、その耳に意外な言葉が飛び込んでくる。

「ロア、えらく大所帯になったものだな」

「おまえが長くないなすぎたんだよ」

剣士とロアが親しげに会話を交わしてのだった。

そう、謎の剣士は、かなり前にロアたちと別れてしまった仲間、アッドだったのだ。

「まあいろいろとな」



「俺たちもだ。まあネッコたちもここにいるぜ、会ってやれば驚くぞ」

「だろうな」

ロアの言葉に、微かに笑みを浮かべながらうなづくアッド。

「しかし、この橋について四日目。さすがに疲れた」

「サンダルークの方から来たのか？」

アッドの呟きに、問いかけたのはライオネルであった。

「……」

「俺たちのお仲間だ。まあ子守の人」

そうロアはアッドに耳打ちする。

「……ああ、あんたらとは逆から」

「そうか。そうすると、コーデリア殿、橋はまもなく渡れそうですね  
ライオネルはそうコーデリアに告げるのであった。」

「ラウドか……」

部屋に入ってくる気配を感じ取り、モードレッドが呟く。

「ボールスが死んだようだな……」

「ほう、すでに知っていたか」

「ああ、まったく、人間になぞやられるとは……戦闘能力を買って、最前線にヴァジュラを送ったが、あやつめ……敵味方関係なく暴れている。その上ボールスまで死んでしまうとはな。この状況に乗じて、トゥオン達に押し返されている。困った状況だ」

「全然困ったようには見えんが？」

余裕の表情を浮かべているモードレッドに問うラウド。

「当たり前だ。私を誰だと思っている？モードレッドだぞ。何の考えもなしに黙って座っていると思っていたのか？すでに体勢は立て直す寸前まできている。ラウド、丁度お前も呼ぼうと思っていたところだ」

「ふむ……だが、残念ながら我が輩はお主の手助けはしてやれん」

「なに？　どういうことだ？」

ふんぞり返っていたモードレッドが、身を乗り出してラウドに問う。

「手を引くと言っているのだ。これで、お主の味方は心強いヴァジュラ君だけになるわけだ。せいぜい頑張るがいい」

「ま、まてラウド！」

モードレッドが、ラウドを呼び止めるが、ラウドは足早にその場を去った。

ラウドがボールの城に戻ると、そこには一人の男が居た。

「メレアガンズか……」

「ラウド殿、今は敵対故、失礼かも知れぬが聞きたい事があって参った」

「ボールス殿のことか」

ラウドが腰の剣を置き、椅子に腰を掛ける。それを見たメレアガンズも剣を置き、対面の椅子へと腰を掛ける。

「やはり本当なのか……それも、人間にやられたと聞く。これがまだ信じられん」

「メレアガンズよ、モードレッドの小僧とやり合うのはよいが、人間にも注意を払わなければならん。特に、あのアトロの血を継ぐ小娘には気をつけるのだ」

「信じ難い話だが……私は武士としてのあなたを尊敬している。そのあなたが言うのなら、それは間違いないのだろう」

「フ……尊敬か。お主はどうに我が輩の力を上回っているというのに……」

「それは関係ないでしょう。して、ラウド殿、我々はやはり戦わねばならないのだろうか？ あなたになら、モードレッドの考えがわかるはずだ」

「当然わかっている。だから、もう奴の力にはならん。そのことを本人にも告げてきたのだ」  
「だったら、我々と共に戦って欲しい」

メレアガンスのその言葉に、しばし黙るラウド。そして、ゆっくりと口を開く。

「メレアガンス、お主も薄々わかっているはずだ。モートは死んだ。復活の時などないのだ。わかるだろう？」

その言葉に、今度はメレアガンスが黙り込む。

「我が輩はお主の力にはなつてやれぬ。さあ、もう戻るのだ。トゥオンが待っている。モードレッドは何か策を弄しておる。気をつけるのだ」

——ヴァルレー大石橋、サンダルク領。

東の海の彼方からぎらついた朝日が登り始める。監視塔の頂上でうたたねをしていた監視兵が、思わずその眩さに目を覚ます。

「ふわあー……」

大きな欠伸。眠たげな臉を二、三度こすり、ぼんやりと橋の方角を眺めたその時、監視兵の背筋に電流のような衝撃が走った。長蛇の列をなした大隊が、自分の監視すべき橋を渡り、今まさにサンダルク領へと進入しようとしているのだ。

「……は？……は、は、班長お！ミルチアの連中がきましたああー！」

泣き叫びながら階下の上司にの元へ駆け込む監視兵。塔内は騒然となった。詳しい状況のわからぬままに城に向かって早馬が使わされ、あるだけの兵隊が塔を抜け出し、防衛線を作る。ミルチア軍が、いや、人間がこの橋を渡ることなどここ百年來は未聞の出来事だから、兵士たちが戸惑うのも無理は無かった。

その状況を見て、橋の大隊……即ち、エーデルリッターを率いるコーデリア隊長はやや呆れ

かえっていた。

「……無用心なものだな」

コーデリアが言うと、隣にいたモリスンが言葉を返す。

「そうは言ってもコーデリア、我がミルチアの監視もこのようなものだろう。魔物の巢食ったこの橋を渡って進軍するなんざ、無茶な話だ」

「我がミルチア、ではないよモリスン。私たちはただの漂流者。いまはそれ以上でもそれ以下でもない」

「おっと……そうだったな」

モリスンが自分の馬の横腹を撫でる。毛艶があまり良くない。ロクに休まずに歩きつづけで、疲れているのは人間だけではなかった。

「まっておれ、もうすぐ休ませてやるぞ」

モリスンがそう言うと、コーデリアは難しい顔をした。

「……」

少数ながら嚴重な警戒をするサンダルク兵を見て、気を引き締めるコーデリア。ある意味ではここからが本当の戦いかもしれない。果たして、我らエーデルリッターが謀反を起こして、ミルチアから脱出してきたことを信用してもらえらるだろうか？特に、鎖国をして他国との交流の薄いミルチアだけに、そこから来たとあれば難しかった。

「貴様ら、ミルチア軍のものどもか！？」

監視隊の隊長が大声をあげる。明らかな敵対心を剥き出しにした声……しかし、疲弊しきつたエーデルリッターの兵隊達は、それでも人の声に安堵を覚えたのだった。

「やった、サンダルク領だ……」

「俺たちは渡ったんだ、この橋を！」

「これで生きてもう一度カレーを食べるな……」

「カレーよりベッドさ！」

口々に歓喜の声をあげるエーデルリッター。監視兵たちは戸惑った。

「これは一体……？」

監視兵の隊長が不思議に思う。

その時、兵たちの間を縫って、一人の魔法使い風の青年が出てこようとした。

「おいこら、ちよつとどけ……」

それがサンダルク王、ユングの家庭教師であるリジヨの息子、また、大魔法使いルドヴィヒの孫、ネッコ・ヴァンシユタインであったから、隊長は我が目を疑った。そして、ますます事情がわからなくなる。

「あ、あなたはネッコ殿！どうしてこんな……」

「そうだそうだ僕だネッコだ。こいつらは全員味方なんだよ」

ネッコが兵士を押しつけて前に出ようとしながら、監視兵の隊長に叫んだ。

「は？み、味方って、そやつらはミルチアの……」

「ミルチアだけ良いミルチアなの。わかるだろ？」

「し、しかし……」

「いやもう、いいから早く城まで案内しろって」

こうして、エーデルリッターは随分ラクにサンダルクへと入ることができた。信用してもらえるかどうかは別問題としても、それでもコーデリアにとってはラッキーな誤算であった。あまりの簡単さに罪悪感のようなものすら感じた。

——サンダルク城。

事務関係の書類をどっさりと抱え込んだスイートピーが廊下を歩いていると、前から良く見知った顔が歩いてきた。ユングの家庭教師でありネッコの父親、リジョ・ヴァンシユタインである。

「おはようございます。リジョ先生」

「ん、こりやスイートピー様。朝から精がでますねえ」

リジョはそう言うと、ばさばさの頭をがしがしと掻きながら、大きな欠伸をした。スイートピーは彼よりも随分目上の人間だが、ユング王の味方という点で個人的な付き合いがあり、とくに気負った様子は無い。

スイートピーもリジョのだらしない格好や仕草に対して、特にどうこう言うつもりもなかつ



た。言っても無駄であろうし、かえってこの人らしさを失わせるかもしれない。いわゆる、気取らない人の良さだ。

「ふあーあ……ん、そういやあ、ユング様の法律改正は順調ですか？」

「いえ。なかなか思うようにはいきませんよ」

スイートピーが薄く笑い、顔の前で手を振る。

「ちよつと見せてもらっていいですか？」

リジョが訊ねると、スイートピーはユングの書いた改正案を取り出し、彼に差し出した。リジョはそれを受け取り、ざつと目を通す。

「うん、うん……なるほど」

リジョが無精ヒゲを擦りながら、うんうんと頷く。

「いかがです？」

「性的なものに対する嫌悪感が露骨なほどだなあ」

「ええ、確かに。それは私も感じました」

スイートピーが言った。

「それに、王は規則にしばられるのを嫌っておいでです。特に、堅苦しいしきたりや伝統を重視する貴族階級の人間に対して、あまりいい感情を持ち合わせておられない……」

「大人に対する不信感の現れ、と見ていいかもしれない。十五歳なんて年頃には誰しもそんな感情を抱くものだが……しかし、貴族を敵に回すのはマズいな」

「逆に平民階級の人々に対しては……」

「ほとんど溺愛と言ってもいい扱いだなあ。貧民や、魔王関係の被災者に対する支援はもはや国の限界を超えたものだ」

リジヨが言うと、スイートピーは心苦しそうな顔つきをした。

「……その事では、先生にもいろいろとご迷惑をおかけしています」

スイートピーがそう言うと、リジヨはあけすけに笑った。

「はは、相変わらずだねスイートピー様も。家庭教師に詫びる元老院議員もないよ」

リジヨはそう言うと、改正案をスイートピーに返した。彼女はそれを受け取り、丁寧に革のファイルに挟む。

「……だがね、スイートピー様。僕は一つの可能性を、あの若きユング王に見ているんですよ。王がまだ世間を知らぬ子供だからこそ生まれ出る、いままでこの国にも成し得なかった可能性にね」

リジヨは窓の方に歩み寄って、外を眺めた。広大な王国の景観が広がっている。

「王国はいま一つの理想に向かって突き進んでいます。余計なしがらみや不純な感情の無い、子供のより純粋な倫理観が、『本来あるべき人の集う形』というものを私たちに教えてくれているのです。それが成功するかどうかは分かりませんが……それを支えるのが私たち大人の役目だし、支える価値があることを多くの民衆が理解してくれている。それはただ形式として存在する『王と民』の関係じゃなく、人の心における信頼感に裏打ちされたものだ。ユング王

はそう言った統治が可能な、希有のカリスマ性を持っている。少なくとも、私はそう信じている。サンダルークは貧乏かもしれないが、本当の意味で強い国なんですよ」

「リジヨ先生のような理解者がいて、王も心強いでしょう」

「私は王のご意志を汲むだけです。ただ……そういった時流の読めない者もいる。自分たちの利権欲しさに王を落とし入れようとする愚か者がね」

「おやおや、時流の読めていないのはそちらじゃございませんかねエ？リジヨ先生！」

ゴロツキのようにドスの利いた声が廊下の端から響く。あからさまに嫌な顔をして舌打ちをするリジヨ。仕方無しに振り返ると、そこに立っていたのは、ぶくぶくとカエルのように太った、油に照りついた表皮の男だった。

「……リンボー元老院議員」

スイートピーが男に向かって言った。その目にはあからさまな敵意が込められている。

リンボーは大きな腹をゆすりながら廊下を歩き、二人に近づいた。

「おはようスイートピーくん。相変わらずお美しい」

リンボーはスイートピーに恭しく会釈し、リジヨのほうに振り返って言葉を続けた。

「ところでリジヨ先生、先ほどの話の続きですが……あなたは人の信頼感がどうのとおっしゃられていましたね。？かしねエ、今は仲良しこよしの政治で上手くいく時勢では無いのですよ。魔王の進撃はもちろん、それに乗じた他国の侵略も懸念されている。それを防ぐには、いまのサンダルークはあまりにもろい！」

「そのためのペルセン、パッセとの三国同盟だ」

リジョが言う。

「プフツ……どこまでも人のよろしい方だ。奴らはね、同盟を隠れ蓑にこちらの寝息を窺っているのですよ」

「リンボー議員、あなたは隣国を馬鹿にしすぎていやしませんか？同盟破棄がどれだけリスクの高い行為か、少し考えれば分かることだ。他の二国を敵に回してまで我が国を侵略するメリットがどこにある？」

「いえいえ。万一、攻められたときの話ですよ。我が国の今の軍事力でペルセンやパッセの侵略に耐えられるのですか？王のワガママを満たすために削りに削られた軍事力でね」

王に対する中傷を耳にし、スイートピーは眉をひそめる。

「耐えられるだけは残してある。スイートピー様のご裁量を疑うおつもりか？」

リジョはリンボーに反論した。

「しかし、例えばもし二国から同時に襲われたら？」

「そのような動きは無い。あれば、諜報部員がなんらかの情報を握るはずだ」

「魔王と戦う姿勢を見せるレオデグランスや鎖国を謳うミルチアにしたって同じ。我が国が安全だという確証はどこにも無いでしょう？ねエ？私の言いたいのはそのことですよ」

「……確証？確証のある安全などどこにあるものか。それほどこの国が不安なら、レオデグランスにでもどこへでも亡命すればよろしかろう！……おっと、それじゃあなたの『積み立て貯

金』が台無しになってしまおうか」

リジヨがリンボーに向かって言った。積み立て貯金とは、リンボーの元老院議員というポジションのことを言っているのだろう。この地位につくまで、彼は膨大なワイロを様々な方面へばら撒き、利害のためには平気で仲間も裏切り、相当悪い仕事もこなしてきた。しかし、ただの家庭教師であるリジヨ・ヴァンシュタインに彼がこうも好き勝手言われるのは、そうした裏の事情をいくつか握られているためである。

リンボーは脂肪で覆われた細い目をピクピクと引きつらせ、更に瞼を細めた。

「……言葉に気をつけなさい。王に気に入られていい気になっている、たかが教師が。こちらがその気になれば、お前一人などどうとでもなるのだぞ」

リンボーは凄みを利かせて言った。しかし、リジヨにまったく怯んだ様子は無い。

「一対一の場所に自分の地位を持ち出し、恥ずかしげも無く振りかざす。男らしくも無いことはおよしになっては？」

スイートピーが眼鏡をギラリと光らせてそう言うと、リンボーは悔しげな表情で彼女を睨みつけた。

「くっ……ふん。いい気になるんじゃないぞ。私たち元老院議員はこの国を救うまで諦めんからな！」

リンボーは捨て台詞を吐き、のっしのっしと重い体を揺すって去って行った。

「……なにが『救うまで』だ。いちいち気に入らないな、あのタヌキ」

リジヨがそういうと、またがしがしと髪を搔いた。スイートピーは黙ったままリンボーの後ろ姿を見ている。

「しかし……たしかに、そろそろ用心したほうがいいかも知れない。最近、ミルチアに不穏な動きが見受けられましたね」

「……とうと？」

「なんでもクラモリ王が暗殺されたとか。その首謀犯が、なんとあの英雄騎士ロットだという噂もある」

「まさか……」

スイートピーが驚く。

「あの国は前からクサイと思っていたんだ……特にあのアルテオムとかいう成り上がり者がね。今回もあいつが一枚噛んでいるかもしれない。ま、私らにできる事と言えば、用心することしかないのだが」

「分かりました。諜報部に絶えず報告を送らせ、精霊の樹海やヴァルレー大石橋の監視も強化しましょう」

「それがいい」

リジヨはふと、スイートピーがどっさり抱えた書類に目をやると、彼女が急に気の毒に思えた。

「……また仕事が増えますね」

「ほほほほ」

高らかに笑い声を上げるスイートピー。リジヨは思わずギクリとした。

「は、はははは」

「ほほほほ」

「あまりご無理をなさらず」

ラウドが立ち去った後、モードレッドは一人部屋にたたずんでいた。片手にワイングラスを持ち窓から外を見つめている。ラウドにも裏切られヴァシユラも当てにならない今、彼は孤立無援のはずだったが彼の顔には余裕の笑みがあった。

「ずいぶん余裕ね」

部屋に澄んだ女性の声が響く。

「セリーン、いたのか。黙って盗み聞きするとは悪い奴だ」

モードレッドが後ろを振り返る。一人の女性が立っていた。整った顔立ち、透き通る様な白い肌にエメラルド色の瞳、露出度の高い黒のドレスを纏い、長いブロンドの髪を垂らしている。その姿は目も眩むほど美しい。

セリーン、副王であるモードレッドの副官にして参謀役である。その容姿の美しさからかつて魔王モートの愛人であったとも言われている。

「いいところに来た。少しチェスでもしていかないか。チェスで私の相手をできるのはお前ぐらいだ。今日は気分がいい」



モードレッドが笑って言った。

「遠慮しておくわ。それよりラウドを黙って帰してよかったの？彼の行動、あからさまな反乱よ。ここは貴方の城なんだから数に物を言わせて、ラウド一人ぐらい殺そうと思えばいくらでも殺せたでしょう」

「かまわんさ。ボールスが死んだ以上、奴一人でできることなどたかが知れている。もう少し放っておいても害はない」

「トウオンの小娘と合流されたら厄介じゃないかしら？」

「その可能性は低いな。まあ合流したところでどうということもないが」

モードレッドがワインを飲み干し、笑う。

「それよりボールスが死んだのには少し驚いたわね」

「まあな。あれだけは私にも予想できなかった。もつとも我々にとつては幸運な驚きだったがな。どのみちボールスはお前に殺してもらおうと思っていたんだ。手間が省けた」

「あら、初耳ね。私に十三使徒の一人であるボールスが殺せたかしら？」

「殺せるさ。まともに遣り合えばお前にまず勝ち目はないが、お前には私に匹敵するその知能があるからな。罠にはめるのはお前の得意分野だろう」

「随分な言い様ね」

「セリーンはそう言って微笑する。

「褒め言葉のつもりだがね。それと一つ、お前に頼みたいことがある。ボールスの居城ネグ

ロードだが、あれを制圧して欲しいのだ。ポールスは死んだし、トゥオンの軍はまだ動いていない、お前にとっては赤子の手を捻るより簡単な仕事だろう？」

「悪いけど他をあたってちょうだい。私少し用があるの」

セリーンが自分の髪をもてあざびながら興味なさそうに答えた。

「私の命令より大事な用とはなんだ？」

「ちよつとした遊びよ。魔界の片田舎の城一つ落とすぐらい、私じゃなくてもできるでしょ。他の奴に任せればいいじゃない」

ポールスはセリーンの言葉を聞いて苦笑した。

「相変わらずだな。まあいいさ、好きにしろ。お前のことだ、遊びといっても無駄なことではないだろう」

「どうかしら？」

セリーンが素っ気無く答える。その時また一人、部屋に男が入ってきた。何かの獣の頭蓋骨を兜のようにかぶり、服は毛皮であしらった物らしい、腰に人間のものと思われる頭蓋骨を三つと短剣を二本ぶら提げていた。かぶっている頭蓋骨の目の穴から覗く瞳は見るからに危ない。相当修羅場を潜り抜けてきた戦士のようなだ。

「失礼します。ん？セリーンもいたのか」

男がセリーンを見て言う。

「久しぶりね、ザーバック。元気にしてた？」

セリーンがザーバックをちらりと見て言う。ザーバックはセリーンには答えず、モードレッドの方を向いた。

「前線で動きがありましたよ。どうやらトゥオンの軍が大規模な攻撃を準備しているようで、後方から兵を続々と集めています」

「ほう？」

モードレッドが面白そうに呟いた。

「もっとも、それでも我が軍のほうが兵数では圧倒的に優っていますかね。心配することはないでしょうが、今まで防戦一方だったトゥオン軍が急に攻勢に出るとは何かあったのですかね？」

ザーバックがモードレッドに向かって言う。モードレッドが答える前にセリーンが口を開いた。「前線の指揮官がメレアガンスからトゥオンの小娘に代わったんでしようよ。あなたそんなこともわからないの？」

ワインを飲みながらセリーンが呆れた様に呟く。ザーバックはセリーンを睨んだが、セリーンはザーバックの顔も見なかった。

「おそらくはそうだろうな。トゥオン嬢は気が短いから、さっさと私と決着を付けたがっているのだろう。まあ、自殺行為だな。メレアガンスならこんな馬鹿な作戦はとらんだろう」

モードレッドが笑って言った。そうしてサーバックに的確に命令を与えていく。前線の地図も見ないで命令を考えるなど普通なら愚かな行為だが、モードレッドの頭の中には前線の地図

くらい入っているのだろう。

「さて、とりあえずこんなものかな。セリーン、何か付け足すことはあるか？」

ザーバックに命令を与え終えたモードレッドがセリーンに聞いた。

「ないわ。まあ、とりあえずは百点満点の作戦でしょうね。わかってるくせに、いちいち聞かなくてもいいでしょう」

セリーンが言った。モードレッドが満足そうに笑う。

「わかりました。私はさっそく前線に戻り、トゥオンの首を持ち帰ってみせましょう」

ザーバックがモードレッドに礼をして、部屋を出て行こうとする。それをモードレッドが呼び止めた。

「待て。お前は私の命令を前線に伝えたら、すぐに別に部隊を収集してネグロードに向え」

「ネグロードですか？あそこはボールスの居城でしょう。あんな所に何のために？」

ザーバックが怪訝な顔で言う。

「ボールスなら死んだわよ。人間に殺されてね」

セリーンの言葉を聞いてザーバックが目を見開く。信じられないといった様子だ。

「そういうことだ。あの地をお前の部隊で制圧しろ。トゥオンが手を回さんうちにな」

「……わかりました。すぐに向います。しかし、私が抜けた後の前線の指揮官はどうしましょう？前線に十三使徒のトゥオンが出てくる以上、こちらもそれなりの者を前線に出さないと危険でしょう」

ザーバックがモードレッドに聞く。

「そうね。トゥオンの小娘は指揮官としては全然だけど、十三使徒の一人だけあって戦闘能力は魔界屈指よ。並みの魔族じゃ相手にならない。いくら兵数でこっちが優ってるとはいえ、あんなのが前線に出られて暴れられたら兵士達が恐れて戦いにならないわ。こっちも何人か戦闘能力の高い魔族をぶつけないとね」

そう言ってセリーンはワイングラスを机の上に置いて考え込む。自分の持ち駒の中から適当な戦力を探して、頭の中でトゥオンとの戦闘をシミュレートしているのだろう。

「……ヴァシユラかネヴィーナを呼んでこっちの前線に向わせるか……それが無理なら正直、ザーバックを前線から外すのは賢明と思えないわ。この男の戦闘力は我々の軍の中では貴重だから」

セリーンがモードレッドに向かって言う。ザーバックもモードレッドの方を向く。

「それは心配いらん。私が直接、前線で指揮を取るからな」

モードレッドが笑って言う。セリーンが驚いた様子でモードレッドの方を見た。

「貴方が前線に出るですって？　どういう風の吹き回し？　前線で指揮を取るなんて捨て駒のする事だっていつも言ってたじゃない」

「その通りだ。だが、ボールスが死に、ラウドが離反して我々の軍の優勢を疑っている者が下々の兵の中にもいるかも知れん。十三使徒の中にもな。いい機会だから思い出させてやろうと思ってるな。十三使徒の筆頭、副王モードレッドの力というものを」

そう言うモードレッドの体から異様な妖気が発せられる。肌が痛みと寒気を感じるような強力な魔力だった。セリーンとザーバックが身を硬くする。

「わかったらお前はすぐにネグロードに向え。すべては私の予想通りに動いている。魔界の新たな王となるのは私だ」

モードレッドは不気味に笑った。

魔界の中央に位置するロギオン平原。そこに総勢三十万近い軍勢が東西に分かれて集まっていた。両軍が距離をとって睨み合う。太鼓の音が鳴り響き、兵士達が歓声を上げる。兵士達を鼓舞する掛け声が暗い空に響き、馬の足音が大地を揺らす。軍勢の中には異形の獣や魔物も見え、彼らの咆哮が耳を劈いた。

トゥオンは大鎌を片手に馬に乗り、前線を駆け回って兵士達を鼓舞していた。トゥオンが前を駆けるたび、兵士達が剣を振り上げ、歓声上がる。

「よく聞け！戦いの優劣は兵士の数で決まるのではない。勝敗を決するのは士気だ！勇気だ！敵はもとより大義は無く、今ポールス、ラウドという重大な戦力を失って士気が下がっている。今こそ大恩あるモート陛下のために逆賊モードレッドを討つのだ！」

トゥオンが兵士達の最前線中央で馬をとめ、モードレッド軍の方を向いた。トゥオンの遙か前方には二十万を越すモードレッドの軍勢が黒い海のように広がっていた。敵を包み込むような鶴翼の陣形だ。

「死を恐れるな！必ず勝てる！」

トゥオンが叫ぶ。トゥオンの後ろで軍勢が歓声で波のようにうねる。

トゥオンがゆっくり片手を上げる。歓声が止み、先ほどまでが嘘のように静寂に包まれる。

「突撃！」

トゥオンが腕を振り下ろし、馬を駆けた。兵士達が怒号を上げ、トゥオンに続く。トゥオンの軍はトゥオンを頂点とする矢の様な三角形の鋒矢の陣形で突撃していった。

モードレッド軍から一斉に何万もの矢が放たれた。突撃していくトゥオン軍に矢が雨の様に降り注ぐ。ある者は馬が射抜かれ、ある者は頭を射抜かれ、次々と倒れていくトゥオンの兵士達。モードレッドの軍からは次々と矢が放たれ、トゥオンの兵士達はバタバタと倒れていく。しかし、それでも突撃は止まらない。両軍の距離はみるみる縮まり、ついにモードレッド軍からの矢は止み、前方に槍兵が進んできた。モードレッドの兵士達が槍を斜めに構える。

トゥオン軍がモードレッド軍と衝突する。最前線の騎馬隊は馬の腹に槍を突き立てられ、倒れる。しかし、その後方からはつぎつぎとトゥオンの騎馬隊が駆け抜けていく。騎馬の上から剣や槍で敵兵を切り払い、馬の蹄で敵を踏み潰していく。ついに両軍は乱戦へと突入した。

トゥオンは馬で駆け抜けながら大鎌を風車のように振るい、兵士達を薙ぎ倒していく。敵の兵士が幾人もトゥオンの突撃を止めようとしますが、トゥオンが駆け抜けると、次々と敵の兵士達が体をバラバラにされ吹き飛ばされていく。まさに鎧袖一触。誰もトゥオンを止める事ができない。ついには敵の雑兵はトゥオンの姿を見ただけで怖気づき逃げていくようになった。トゥ

オンは放たれた矢の様にモードレッド軍の中央に向って突き進んでいった。

モードレッド軍の本陣は小高い丘に陣を取っている。そこにモードレッドはいた。モードレッドが戦闘を眺める。海が割れるようにトゥオン軍がモードレッド軍の中を突き進んでいく。その先頭にいるのはトゥオンだ。

「ふん、さすがだな。雑兵では止められんか」

モードレッドが呟く。

「このままではここも危険です。もう少し後方に本陣を移した方がよろしいのでは……」

モードレッドの横にいる高級士官が言う。確かにこのままではすぐにトゥオン軍がここまでやって来るだろう。

「危険だと？笑わせるな」

モードレッドが言う。高級士官はモードレッドに睨まれ、震えて奥に引き下がる。

モードレッドが魔法の詠唱を始める。モードレッドの体が青い光に包まれた。片手を空に振りかざす。雷鳴と眩い光と共に数十本の巨大な雷がトゥオン軍に落ちる。

爆発と共に、一発の落雷で数百の兵士達が虫ケラのように吹き飛んでいく。それまで破竹の勢いで進んでいたトゥオン軍だったが、モードレッドの魔法一発で大混乱に陥った。

トゥオンが焦げ付いた死体の山から身を起こす。辺りには黒焦げた人と馬の死体が至る所に



転がっていた。馬を走らせていたトゥオンは突然の空からの閃光に撃たれ倒れたのだ。トゥオン自身にたいした傷は無いが、乗っていた馬はやられてしまった。雷に当たらなかつた騎馬兵も馬が爆発音と閃光に怯えてしまい暴れまわっている。トゥオンが空を見上げる。とんでもない落雷だ。こんな強力な魔法を使えるのはモードレッド以外にありえない。奴もこの戦場にいるのか。トゥオンは大鎌を手にとって走り出した。

虫ケラのように慌しく逃げ惑うトゥオンの兵を見てモードレッドが低く笑う。そのモードレッドの姿を見て高級士官は後ずさりした。すでにモードレッドのいる本陣も敵味方入乱れて戦っている。剣と剣がぶつかり合う戦場の中でモードレッドだけが平然と立っていた。高級士官は己の身の危険を感じて逃げ出した。鋭く空を切る音がする。血飛沫を上げ、高級士官の体が細切れになって飛び散った。鮮血を浴び、修羅の形相をしたトゥオンがモードレッドに歩み寄る。モードレッドがトゥオンの姿を見て笑みを浮かべる。

「ふん、さすがだな。この劣勢でここまでたどり着くとは。それに血に濡れたその姿、まさに死神の異名にふさわしい」

モードレッドの言葉には反応せず、トゥオンがモードレッドを睨む。

「臆病者の貴様が戦場に出てきたことは褒めてやるが、その勇気が命取りになったな。ここがお前の死に場所になる」

トゥオンがそう言って大鎌を構える。

「貴様にできるか？」

モードレッドが笑う。

「ふん、私は城の奥でぬくぬくと暮らしていた貴様とは違う。この距離で得物も持たずどうやって私の大鎌を防ぐつもりだ！」

トゥオンの言うとおりだった。トゥオンとモードレッドでは戦いのスタイルが違う。刃渡り二メートルを越す大鎌を扱う近接戦闘タイプのトゥオンに対し、モードレッドは魔法を主体として戦う。だが魔法にはどうしても詠唱のタイムラグが生じる。すでにトゥオンとモードレッドの距離は十メートルもない。トゥオンなら瞬きする間に詰められる間合いだ。おまけにモードレッドは丸腰。死神の鎌と恐れられるトゥオンの大鎌を素手で防ぎきれぬだろうか。

トゥオンが大鎌を振りかざし、地を蹴った。魂さえも刈り取るような死神の一撃がモードレッドの首に襲い掛かる。

モードレッドが片腕を上げる。あろうことか手のひらでトゥオンの一撃を受けようとしている。モードレッドの手のひらとトゥオンの大鎌の刃が触れた瞬間、バチツと言う音と共に青白い火花が散る。

「ちっ！」

トゥオンが唸る。モードレッドが掌に小さな魔法壁を作り、トゥオンの一撃を防いだのだ。トゥオンは大鎌が弾かれた衝撃を利用して体を反転させると、逆方向から再び大鎌の一撃を繰り出した。しかし、その一撃は虚しく空を斬る。モードレッドが紙一重で身を屈めてかわした

のだ。大鎌に触れて切れ飛んだモードレッドの黒髪が宙を舞う。大鎌を振り下ろした反動でトゥオンが一瞬無防備になる。すかさずモードレッドがトゥオンの腹に掌這を繰り出した。

トゥオンの体が宙に浮き、十数メートルも吹き飛ぶ。トゥオンは空中で体と捻って上手く着地したが、そのまま地に膝を突き、咳き込み口から血を吐き出す。トゥオンの腹の部分の衣服は焼け焦げた様に破れ、そこから見えるトゥオンの白い肌は青黒く焼け爛れていた。どうやらモードレッドは掌に魔力を込めていたようだ。

「私が体術を心得ていないとでも思ったか。あいにくだが私はただの非力な魔法使いなどではないぞ」

モードレッドが胸の前で腕を組んで笑う。彼の体全体から青白い光が放たれている。彼の体から発せられる目に映るほどの魔力だった。

「もちろん一番得意なのは破壊魔法だがな」

モードレッドが片手で素早く印をきる。そのまま片手を前に差し出した。モードレッドの掌から鋭い雷が放たれた。避ける暇もなくトゥオンの体が雷を受け跳ね上がる。声にならない声をあげ、トゥオンが地面に倒れ込んだ。

「私に逆らったことを後悔して、苦しみながら死ぬがいい」

再びモードレッドの掌から雷が発せられる。懸命に起き上がろうとしていたトゥオンの体を再び雷が撃つ。痙攣を起こすようにトゥオンの体が跳ね、そのまま動かなくなる。

モードレッドが悠然と倒れたトゥオンの元に歩み寄っていく。モードレッドがトゥオンの手

に目をやる。その手は大鎌を強く握り締めたままだ。

「ふん、意識もほとんど無いだろうに、その闘争心だけはたいしたものだ。だが相手が悪かったな」

とどめを刺そうとモードレッドがゆっくりと片腕を上げる。その時、地面に伏していたトゥオンが首を動かし、顔を上げてモードレッドを見た。

「……ソウルシャドウ……」

トゥオンが途切れそうな小さな声で呟く。声と共に倒れているトゥオンの体から微かに青白く光る人形が浮かび上がった。その姿、顔ともトゥオンと瓜二つだ。

トゥオンの分身がモードレッドに襲い掛かる。虚を突かれた形になったモードレッドは慌ててトゥオンの分身に雷を放つ。

「なっ！」

モードレッドが目を見開く。雷は何の手ごたえも無くトゥオンの分身をすり抜けてしまったのだ。トゥオンの分身が大鎌をモードレッドに振るう。モードレッドは完全に避けるタイミングを失い、そのまま袈裟切りに右肩を大鎌に切り裂かれた。モードレッドが後ろ向きに倒れる。そのままトゥオンの分身は空中に溶けるように消えてしまった。

モードレッドが右肩を押さえ、震える足で立ち上がった。

「くっ……こんな奥の手を隠し持つてるとはな……」

モードレッドが倒れているトゥオンを見る。最後の力を振り絞ったのだろう、トゥオン倒れ

たまま意識を失っていた。モードレッドとトゥオンは数百年来の顔見知りだが、こんな技を持つているとは知らなかった。十三使徒といっても互いに敵同士のようなものだ。それぞれ本当の実力は隠しあっている。お互いどんな秘術を持っているかわかったものでない。

モードレッドは、もう相手が虫の息だったとはいえ不用意にトゥオンに近づいたことを悔やんだ。片手で右肩の傷口に触れる。かなり深い。骨まで断たれているだろう。もう少し深ければ十三使徒のモードレッドといえども命は無かっただろう。

「だが、戦いは私の勝ちだ。トゥオンはすでに意識を失って戦う力は無い。傷ついたといえども、死にかけの者を殺す力ぐらいいは十分残っている」

モードレッドは再びトゥオンの方を見た。しかし、そこには倒れているはずのトゥオンの代わりに、茶色のローブを纏った白髪の老人が立っていた。老人はトゥオンを抱きかかえている。騒がしいはずの戦場だったが、その白髪の老人の周りだけ異様なまでの静けさを感じる。まるで白昼夜でも見ているような現実感の無い感じだった。フードの奥から覗く老人の顔には深い皺が刻まれ、透き通った青い瞳、顎に白い髭を蓄えている。この顔は……。

モードレッドが歯軋りする。

「……また貴様か……なぜ我々の邪魔をする！」

モードレッドは傷の痛みを堪え、叫んだ。白髪の老人は何も答えない。澄んだ瞳でモードレッドを見つめていた。

「三百年前もそうだ！貴様はアトロに力を貸し、モートを殺すのを助けた！」

モードレッドが再び叫ぶ。白髪の老人は静かに口を開いた。

「私は誰にも力を貸したりはしない。すべては定められた運命だ。魔王モートといえど所詮運命の一因子に過ぎぬ。モートは死ぬべき時に死すべき時に死んだ。この娘もまた運命の一因子。そしてこの娘はまだ死ぬべき運命ではない」

「……貴様の詭弁はもう数百年も前に聞き飽きた。今度はその運命とやらで私を殺すつもりか？」

モードレッドは自嘲気味に笑う。

「お前もまだ死ぬべき運命ではない。お前もこの娘も成すべき事を成して、死すべき時に死ぬだろう。運命は誰にも変えられぬ」

白髪の老人はそう言うと、モードレッドに背を向けた。

「さて！このまま黙って行かせると思うのか？」

モードレッドが白髪の老人に向けて呪文の詠唱に入る。しかし、白髪の老人の姿はトゥオンと共に霞のように消えてしまった。

モードレッドが魔法の詠唱を中断する。一息つくくと、傷の痛みには耐えられず、地面に膝をつく。モードレッドは辺りを見回した。トゥオンの軍が撤退していく。どうやらかなりの被害は出したものの、戦いはモードレッド軍の大勝に終わったようだ。

モードレッドは白髪の老人の消えた場所を見つめた。

「……化け物め……クロート……貴様はいったい何者なんだ……」

そう眩いたモードレッドの頭の中に声が響く。

「私は運命の監視人、調停者、世界を導きし者」

モードレッドは空を見上げた。いつの間に晴れたのか、空は遥かに高く、白い雲が流れている。殺伐とした戦場に似合わないほど澄んだ青空だった。

薄暗い森の中、激しい蹄の音だけが辺りの音を打ち消して響いている。

「トゥオン、どこにいる！？」

ボールの居城ネグロードでのラウドとの別れの後、メレアガンスはトゥオンの元へと戻る帰路、トゥオン軍の大敗を聞く。

メレアガンスの中にあるものは焦り、そして自分自身への憤りであった。

「トゥオンが兵を動かすことは十分に考えられたはず、それをみすみす……」

メレアガンスはロギオン平原の南に位置する森の中をトゥオンの姿を求めて疾走していた。

まだ討ち取られてはいない。そう言った感覚。それは使徒同士の感覚であろうか、そんな確信的な思いがメレアガンスを突き動かしていた。

「どこにいるのだ……」

もうすでに何時間が経過したであろうか、しかしメレアガンスは疲れを感じることなくトゥオンを探していた。

ロギオン平原の北の森林地帯に差し掛かったとき、メレアガンスの意識に直接語りかける声



が聞こえる。

「メレアガンス？聞こえて？」

その声にメレアガンスは聞き覚えがあった。

「ネヴィーナか？なんの用だ、今私は忙しい」

「トゥオン嬢のことでしょう？」

「用件を聞こう、事と次第によっては……」

メレアガンスの声に気迫がこもる。

「私は貴方とことを構える気はないわ……とりあえず、魔界の北。古城カムナギムトにいらっしやい。貴方なら数時間でこれるでしょう？そこにトゥオン嬢もいるわ」

「!？」

ネヴィーナの申し出に、メレアガンスは驚愕の表情を浮かべる。

しかし、瞬時に警戒の色を浮かべる。

「……そこにトゥオンがいるという確証は？」

「私を信じるしかないわね」

「貴公はモードレットの側ではないか、罨と疑うのが自然だと思いが？」

メレアガンスはそう自分の見解を述べる。そのやり取りは彼にとつて一種の賭けでもあった。

「私はモードレットの側についた覚えはないわ。まあ信じてくれるかどうかは別として、私の案内以外にトゥオン嬢への繋がりはないと思うのだけれど？」

ネヴィーナは、メレアガンスの痛いところを突いた返答を返した。

「確かにな、わかった。カムナギムトへ行こう」

メレアガンスはネヴィーナの誘いに乗ることにした。それと同時に、彼は賭けに勝ったとも言えた。使徒の中には汚いものもいる、しかしネヴィーナはそちら側の気性の持ち主ではなかった。その彼女が罫ではないといっている。それは信頼に足る言葉だと思われた。

「お待ちしているわ」

その声が聞こえると同時に、メレアガンスの意識に語り掛ける声はなくなり、辺りには静けさが戻った。

「カムナギムトか……ここ数百年脚を運んだことはなかったな」

そう呟くなり、彼の駆る馬は一陣の疾風と化したのだった。

数時間後、魔界の最北端に位置する古城、カムナギムト。そこに三人の使徒が会合していた。しかし、一人は瀕死の重傷とも言える傷を負っており、意識もまだなかった。

「いらっしやい、メレアガンス」

到着したメレアガンスに落ち着き払った態度で応じるネヴィーナ。薄暗い古城の一室、その闇の中に彼女の薄い桃色の長髪が鮮やかに浮かび上がり、その白い肌に、見事に着こなされた黒のサマードレスが見るもの魅了する。

「トゥオンはどこだ？」

しかし、そんな魅惑を前にしてもメレアガンスの態度は一片たりとも変わらなかった。  
「せっかちな人ね。そのベットに横たわっているわ」

そう言つてネヴィーナは部屋の角の指差した。

メレアガンスが目を凝らしてみると、確かにそこにはトゥオンが横たわっていた。  
駆け寄るメレアガンス。

ベットに横たわるトゥオンは意識こそ回復していないものの、規則正しい息遣いであった。

「ネヴィーナ、この状況の説明をしてもらいたい……トゥオンをやったのは貴公か？」

殺気を放ちつつメレアガンスが問いかける。

「賢明な貴方ならお分かりだと思つただけだ？」

メレアガンスの殺気を受け流しつつ、ネヴィーナは平然と言い放つた。

その言葉を聞き、殺気を消すメレアガンス。

「そうか、ではモードレットと言うことになるな」

「そうでしょうね。トゥオン嬢にここまでの傷を負わせることができるのは使徒以外ではないないでしょうしね」

あっさりとネヴィーナは同意した。

「ところでネヴィーナ、トゥオンはどこで？」

かねてより疑問に思つたことを口にする。

「ここよ。この古城にいたの、私が見つけたときにはね」

「ここに？」

怪訝な表情で問い返すメラアガンス。

「ええ。私が空間移動を得意としていることはご存知でしょう？少しトゥオン嬢に聞きたいことがあってね、それで探してたのよ」

「聞きたいこと？」

「ええ。先に行っておくけれど、今の魔王軍の戦力がどうかいった類のことではないわよ」  
鸚鵡返しに言葉を発したメラアガンスに釘を刺す。

「トゥオンしか知り得ないことなのか？」

「そうね、トゥオン嬢と、モードレットしか知らないのではないかしら」

そう軽い断定を含んだ返答を返すネヴィーナ。

「差し支えなければ聞かせてもらいたいのだが？」

「……」

メラアガンスの申し出に、ネヴィーナは右手の親指の爪をしばし噛んだ後、

「たわいもないことよ。ヴェネルクスのことについて聞きたいだけ」

とそう呟いた。その声にはひどく悲しげな感情が込められているとメラアガンスは思った。

「ヴェネルクス？ヴェネルクス・ガルガンディのことか？いまさらどうして？」

「いまさら？貴方にはそうかもしれない！けど私にとっては……」

ひどく声を荒げたかと思うと、最後のほうは聞き取れないほどかすかなものになっていった。「聞きたいのはひとつだけ。モート陛下とアトロの最終決戦。その時のことは、私はしばらく前から違う場所へ配置されていたから知らないのだけれど、副王であるモードレット、親衛隊であったトゥオン、そして、モート陛下の右腕として戦場では常にその傍らに侍っていたヴェネルクス。その四人がいたはず。そして、モート陛下は傷つき倒れられた。そこまでは誰でも知っている。だけどヴェネルクスのことを知る者はいない。だから直接知るものに話を聞くことにしたのよ」

一息でネヴィーナはそう告げた。

「……」

思案の表情を浮かべるメレアガンス。

しばしの沈黙があたりを満たす。

そして、その沈黙はメレアガンスから破られた。

「ネヴィーナ、落ち着いて聞いてくれるか？」

「何を聞けばいいのかしら？」

そう簡潔に返答するネヴィーナ。

さらにしばしの沈黙の後、

「ヴェネルクスはその戦場にはいなかった」

その一言は、ネヴィーナの表情を驚愕に変えうるには十分な一言であった。

監視兵の隊長に連れられ、一向はサンダルーク城へと辿り着いた。

「じゃあ僕はちよつと話してくるから、みんなを休める場所に案内しておいて」  
ネツコは監視兵の隊長にそう伝えると、足早に奥へと進んでいく。

「……仕方ない。お前等ついて来い」

そう言うのと、監視兵の隊長はずかすかと歩いていく。それについて行く一向。

「すまないが、もう一つ個室を用意してもらえないだろうか？」

コーディネリアが監視兵の隊長に言う。監視兵の隊長はしかめっ面でコーディネリアを睨んだが、  
「この先に別棟がある。そこに個室もあるから好きに使うがいい」

そう言って、先へと進んで行く。

「ここがそうだ。誰もいないから好きに使うといい。水と食事は後に手配するから、とにかくここから出ないようお願いする」

「わかった。恩に着ます」

監視兵の隊長は、扉を閉めて去っていった。

「さあ、ここは安全だ。みんなはゆっくり休んでくれ」

コーディリアは兵たちにそう言って、辺りを見回す。

「よし、あそこを使おう……ヴァネッサ、ヨシユア、クーガーにエレイン皇女、それにモリスンとロット殿、あそこの個室に来てくれ」

コーディリアはそう言い、個室のほうへと進んでいく。

「メルフィナ、お前も来い」

モリスンがメルフィナを呼ぶ。

「え、私ですか？」

「当たり前だろう」

モリスンがそう言い、個室のほうへと歩いていく。その後を、困った顔でメルフィナが追っていく。

コーディリアに続き、呼ばれた面々が部屋の中へと入っていった。部屋の中には数個の椅子とテーブルがあった。

「皆、好きなどころへ」

コーディリアはそう言って、テーブルの前に立つ。各隊長、エレインにモリスンは椅子をテーブルの近くに持っていき、そこへ腰を掛ける。メルフィナとロットはやや後ろで立ったままだ。

「気にせず座って」

コーデリアが言うが、メルフィナとロットは首を横に振る。

「そうか……さて、何故集まってもらったかは皆もわかっているとと思うんだけど」「これからどうするか……だろ？」

コーデリアの言葉に続き、ホワイトナイトの隊長ヨシユアが言う。

「大まかに言えばそうなる」

「ミルチアに装甲蟲……あれに対抗するには数的に不利すぎるわ」

ルビーナイトの隊長、ヴァネッサが落胆の声を上げる。

「それよりも、これから何処に向かうかではないか？」

エメラルドナイトの隊長クーガーが言う。

「確かに、このままサンダルクに居座るわけにはいかない。中立国であるサンダルクの協力も期待できんしな……」

「レオデグランスにさえ行ければ、兵をお出しする事は可能ですが……」

今度はエレインが言う。

「レオデグランスに行くルートは三つ。あの大穴を通るか、樹海を通るか、迂回して砂漠を通るか……どこを通るにしても危険なことに変わりはない」

コーデリアのその言葉を旨に、沈黙がその場を支配する。しばらくして、コーデリアがもう一度口を開く。

「アルテオムと戦うにしても、ただ戦うだけでは、我々は世間からただの逆賊として見られる



ただだろう。何か証拠か、その戦いが正当化できる何かが必要なだけ……」

「かつて、ヘンギストという錬金術師がいた。十三使徒でもあるヘンギストは天才的な頭腦の持ち主だった。ヘンギストが作った物が、まだこの世に残っているのであれば、その中に過去の映像を映し出すものがあるかもしれない。それを手に入れることができれば、アルテオムの暴挙を暴く事ができるかもしれん」

モリスンが淡々と話す。

「今となつては、十三使徒の存在を疑う事はないが……本当にそんな物が残っているのか？ いや、存在するとも限らない……」

「コーデリア、どちらにしろ我々に打つ手はない。これは賭けには変りないが、可能性があることに変わりもない」

「しかし、何処にあるかもわからないのに……」

コーデリアのその言葉に、再び沈黙が訪れた。

ミルチア第一城内部、アルテオムは地図を広げたまま、黙ってそれを眺めていた。

（ミルチアは我が物となった。兵も装甲蟲も他国を攻めるだけの数を揃えた。この期に及んで、私は内をぐずぐずしているのだ？コーデリアは逆賊としてサンダルクに逃亡した。私を拒むものはなんだ？）

アルテオムは目を閉じ、ゆっくりと深呼吸を行う。

(何か……不特定多数のものが私の邪魔をする……後は各国に私の力を見せつけ、魔族どもを一掃するだけだと言うのに……！これが、これが王の重圧というものなのか？それとも、王になれた喜びにもう少し浸っていたいのか、その逆か……何にしても、第一歩を踏み出すと同時に、少しでも私の脅威となるものを消していくしかないようだ)

アルテオムは地図をたたみ、椅子から立ち上がる。

「誰か、いないか！」

そうアルテオムが叫ぶと、一人の兵士が飛んでくる。

「サンドルークへ侵攻を開始する。すぐに出発するぞ！」

兵にそう告げ、アルテオムは剣を手を取った。

——サンダルーク城・会議室。そこには、王に特に信頼を置かれた数名の部下と、將軍や元老院議員、大臣などの重鎮が集まり、今回の騒動の大筋を話していた。

「なりませんぞっ！」

スイートピーが状況説明をしている最中、とつぜん老將軍シーグムンドが机に拳を叩きつけて叫ぶ。会議室にいた全員の体が一瞬ビクついた。

「ミルチア城からの脱走兵を受け入れるなど、先代がお聞きになったらどう思うことやら！ わしは反対ですぞっ！」

「しかしシーグムンド將軍、彼らの証言に疑わしいところはありませんよ」

スイートピーが落ち着き払って言った。

「リジヨ先生の情報通り、やはり全てはアルテオムの陰謀のようです」

しかし、シーグムンドは更に声を荒げた。

「こちらが睨んでいた、とな？ ふん、そう言えば確かに聞こえはいいが……例えはそれを含めて全ては向こうの思惑通りだとすれば、その時はどうなさるおつもりですかの？」

「ヴァルレーの石橋を渡るなどという危険な賭けをさせるとは思えませんよ。失敗すればエーデルリッターという由緒ある部隊を丸々失うところだったんですから。実際、エーデルリッターには相当の死傷者が出たようです」

スイートピーが答えた。

「それに、アルテオムはそこまで頭の回る男でもありません。吸血鬼による内乱、王殺しに最適な人物の登場……アルテオムが王座につけたのは、偶然が奇妙に絡み合つての出来事です。利己心を魔族に利用され、己の力で王へと成り上がったと勘違いしている、言わばただの道化師に過ぎませんから。しかもその黒幕である使徒ポールスは、すでに彼らが倒れているのです」

（ただ、無知ゆえの無計画さがイノシシのように襲い掛かってくることもあるけれど……それに機甲蟲はたしかにやっかいだわ。まさかあれが完成していたなんて……）

スイートピーの不安をよそに、使徒、という言葉に会議室がざわめく。

「使徒？使徒ですと！？あの使徒を？いったい誰が……」

「エレイン王女です。いまユング王が謁見に……」

「エレイン王女おっ……!?!?」

シーグムンドは一瞬、ぶるりと体を震わせ、顔色を真っ青にした。

「こんなところで会議しとる場合か！」

シーグムンドはバネのように椅子から飛び上がると、一目散にユング王の下へと駆けて行っ

た。

(……だから、会議も何も、ただの状況説明の最中だったのに……)

スイートピーはそう思いつつ、残った他の幹部たちに説明を続けた。ついでにこれからの方針を軽く講じた。二、三の反論はあったが、結局は彼女の案に従うのが一番無難だった。その辺の彼女の手腕は敵対するリンボー議員たちですら認めざるを得ない程であり、スイートピーは若くして、執政というものの本質を捉えていたのだった。

……しかし、ユングの傍らで彼の無茶を聞き届けている彼女にとって、あるいはそんなことはなんでもないのであるかもしれない。

——王の間。

エレイン王女は数名の部下、仲間を引き連れてユング王の元へ現れた。

「我が同胞の受け入れを許諾していただき、ユング王の寛大な御心に感謝いたします」

エレインはそう言うと、頭をたれて恭しく礼をする。後ろでコーデリア、ライオネル、ロツト、ネツコの四人も同じように頭を下げた。

「こちらもお会いできて嬉しい。勇者アトロの子孫、エレイン王女」

ユングは幼い声色で精一杯威厳を出そうとしながら言った。会議室にいるスイートピーや將軍達の代わりに彼の傍に居るのは数名の近衛兵と、家庭教師リジョ、そしてこういう時に見栄えのいい妖精騎士クローリン（本人はあまり好んでやっているわけではないが）だった。

「長旅で疲れているところ、こんな形式ばった謁見に引っ張り出して申し訳ない」

「いいえ、とんでもございませんわ」

エレインは品の良い笑みで答えた。自分よりもさらに年下のユングの言葉を聞き、友人になれるタイプだな……と彼女は思った。

「ネッコ・ヴァンシユタイン、我が同胞よ。よくぞここまでエレイン王女を守ってくれた。サ  
ンダルクを代表して礼を言うぞ」

ユングが言うと、ネッコは得意げに頭を下げる。

「もったいないお言葉です」

ネッコはちらりとユングの隣に立つリジヨの方を見た。

「……」

リジヨはしばらく難しい顔をしてネッコを見つめていたが、やがてがしがしと頭を搔いて、  
目を逸らす。

ネッコはそれが気に入らなかったのか、ふん、と鼻息を吹いてユング王の方へと視線を戻し  
た。

「……?」

二人の様子をこっそりと見ていたクーフリーンが、不思議そうな顔をする。家族間にだけあ  
る空気というものであろうか? 家族のいない彼女にとっては、羨ましいだけで少しも分からな  
い感覚だった。

「レオデグランスにはいつ帰られるおつもりだ？」

「いえ、私はレオデグランスには戻りません。私には魔王を倒すという使命がありますので」  
エレインが言った。周りがざわめく。

「ええっ？あなたが？」

驚いた瞬間、思わず子どもっぽさがにじみ出るユング。

「はい。ただ、兵の要請に早馬を貸してもらいたいです」

「兵の要請……」

ユングはリジヨの方をみた。政治の毛色や方針についてはともかく、細かい判断は彼やス  
イトビーに任せていた。努力は精一杯する、しかし、あくまで自分の力の及ぶところまで……  
それが正しい事だと、ユングは理解していた。

「それは、魔王軍への侵攻のためですか？」

ユングの代わりに、リジヨが訊ねた。

「いえ、その前にこのサンダルクの守備が最優先でしょう。我々を追って、間もなくミルチ  
ア軍の侵攻が始まるに違いありません」

エレインではなくコーデリアが言った。リジヨが彼女の方を見る。

「そちらは……」

「おっと、これは失礼。私はエーデルリッター・ブラックナイト隊長、コーデリア・レキ」  
コーデリアは軽く礼をする。

「我々はミルチア軍にとって王殺しの逆賊です。そのような戯言、もちろんレオデグランスやペルセンなどの隣国が信じるとは思えません。ミルチア内にはアルテオムの強力な情報隔離が及んでいます。ミルチアを正しい状態に戻すには、民衆に真実をその目で見てもらわねばなりません。そこで、サンダルクの優れた調査力をお借りして、魔鏡と呼ばれる秘宝を探して頂きたいのです」

「魔鏡……人の過去を映し出す、あの魔鏡ですか？使徒が作ったものだと言ったことがあるが、しかし、果たして実在するかな」

リジョが顎の無精ヒゲを擦りながら言った。

「それは分かりません。しかし、それでも私達は可能と思われる全ての可能性を当たってミルチアを取り返さなければなりません。また、それが……即ち、アルテオム率いるミルチアの崩壊が、サンダルクの未来にも繋がることも付け加えておきましょう。一度助けていた身でこれ以上の要求をするのはこちらとしても大変心苦しいが……どうか一刻を争うのです」

コーデリアの言葉を聞き、ユングはちらりとリジョの方を見た。

リジョは静かに一度だけ頷く。

「あなた方が祖国を思う熱意は分かった。私達が貸せるものならいつでも貸そう」

ユングが言うのと、コーデリアはその場に跪き、恭しく頭をたれた。

「ユング王……ありがたき……」

コーデリアが言葉を言いかけたところで、どかーんと開かれる王の間の扉。全員の目が急遽



そちらに向けられる。中には、あまりに唐突の出来事に剣の柄を握っている者もいた。

「がっはっはっは！エレイン王女、ごきげん麗しゅうございます！」

シーグムンドである。王座からずり落ちそうになっていたユング王が、慌てて佇まいを正す。  
「……へ？」

エレイン王女はあっけにとられていた。

「わしはシーグムンド將軍。先代とそちらのアバロン王とは実に良き友人であった……そのお二方の子供がこうして顔をつき合わせているのじゃから、いやあ、時代の流れを感じるわい！」

相手が完全に引いているのにもかまわず、シーグムンドは大声で続けた。苦笑いを浮かべるリジョに、呆れて溜息をつくユング。クーフリーンは上司の振る舞いに恥ずかしい思いをして頬を紅潮させた。

（この方が猛将シーグムンド……さすがだ、陽気に振舞っているものの、体から放たれる覇気は普通じゃない。これが本物のオーラか……）

ロットだけは尊敬の眼差しでシーグムンドを見ていた。自信を失いかけていた人間にとって、こういった英雄の存在は他のなにも増して勇気づけられることがある。ロットは、この老いた將軍に自分のなかを触発された。しかしそれが本当に開眼するのは、まだ先のことである。

——サンダルク城、城下町。

ミルチアからの脱走軍で大騒ぎを起こしているミルチア城を背に、片目に布切れを巻いた一人の少女がふらふらと歩いてきた。その足取りはおぼつかない様子。時折、木陰に手については、短い溜息を吐いて、また歩き始める。

「どーこ行きやがんだ」

ロアが少女……アムリタの背後から声をかけた。

「……」

アムリタが振り返ると、ロアは彼女の顔色の悪さに驚いた。と、同時に、例の血の涙事件を思い出す。

「……体壊したまんまじゃねえのか？」

ロアの言葉。

アムリタは平常を装っているものの、眼球の奥が炎で焼かれるように、ずきずきと疼く。頭痛も酷かった。悪魔の瞳の拒絶反応はついに限界のところまできているのである。

「……心配してくれているの？」

アムリタの震える声。

「そりゃな。その顔で心配すんなって方が無理だろ」

ロアがそっけなく言う。

「で、どこに行くんだい？そんな状態で」

ロアが改めて訊ねるが、アムリタはしばらく何事かを考えた後、黙って踵を返した。

「おいこら！」

「……お別れっていうの、したことはないの。私は」

「は？お別れだあ？」

ロアは素つ頓狂な声を上げた。

「っ……はあはあ……アムリタ！」

再び歩き出そうとしたアムリタを制する、メルフィナの声。一緒に町を散策していたロアがアムリタを発見して追いかけたのを、彼女はいまようやく追いついたのだった。走ってきたために、少し息を切らしている。

アムリタはまた振り返って、メルフィナの方を見た。

「お別れってどういうこと？」

問い詰めるような口調のメルフィナ。

「……父親のもとに帰るのね」

「……そうよ」

アムリタは言った。三人をじっと沈黙が包む。

引き止める権利などない。理由もない。それでも気になるのは、アムリタのこの覚悟にも似た表情はいったい何なのだろう？アムリタは自分のことなど、一言も語ろうとはしない。最後の最後まで自分は彼女にとっては他人だったのかもしれない……メルフィナはそれが少し残念

だった。

「さようなら」

アムリタが言った。メルフィナは思わず、がしっとアムリタの腕を掴む。

「まって、アムリタ！」

「……」

「……そんな思いつめた表情でいるのを、誰かが訊ねたところであなたは答えないんでしょう？ いいのよ、あなたがそんな人間だってこと、私達はとうに知っているんだから！でも、一つだけいい？」

ロアは一步引いたところでタバコに火をつけ、二人のやりとりを無表情に見ている。

メルフィナは続けた。

「あなたがどう思おうが、私達はあなたを友人だと思っているから。だから、さようならじゃないことを約束して。きつと、またいつか会えるって」

アムリタはロアとメルフィナの顔を交互に見た。

「……ええ、そうね。またいつか」

アムリタの言葉に、真剣な顔つきだったメルフィナが表情を和らげた。

しかし、ロアだけはずっと無表情だった。

まっすぐ、一度も振り返らずに自分達から離れていくアムリタの背中を、ぼんやりと見つめ

るロアとメルフィナ。

「……嘘かもな」

「……?」

「あいつ死ぬぞ」

驚いてロアの方を振り向くメルフィナ。

「……え……?」

吸血鬼の勘……というものだろうか?人よりもずっとするどい動物的な感覚で、ロアはアムリタの表情の奥に宿る悲しい宿命を見抜いていた。

サンダルーク城内の廊下をライオネルは歩いてきた。歩く姿に隙が無い。いつものことだが近寄り難い雰囲気を出している。城内を歩く人々もライオネルからは離れて歩いた。

「おお！ライオネル殿！」

そんな中、後ろから大声でライオネルを呼ぶ声がある。ライオネルが振り返った。シーグムンドが笑顔でライオネルの元に走ってきているところだった。

「これはシーグムンド殿、お久しぶりです」

ライオネルが頭を下げる。

「うむ、先ほどの王の間では話す機会も無かったからな。こうして話すのはずいぶん久しぶりだのう」

「ええ、境界地域の戦場以来ですか」

ライオネルが言う。二人は其々の国の軍の指揮官として境界地域で共に魔族と戦ったことがあった。

「……ふむ、お主何か変わったのう。昔よりもだいぶ丸くなったようじゃ」

シーグムンドがおかしなことを言う。この常に岩の様な険しい顔をしているライオネルのど  
こが丸くなったのだろう。

「昔のお主は、見るだけでなんともいえぬ寂寥を感じたものよ。魔族への復讐のためにただ戦  
い続けるだけの男。まるでいつも自分の死に場所を探しているようじゃった」

「死だけが我々戦士を温かく迎えてくれます」

ライオネルが揺ぎ無い口調で言った。

「確かに。だが今のお主は違うようだ。何か護るものでもできたかの？」

「……」

シーグムンドが言う。ライオネルの表情は変わらない。

「……やはりあのエレイン姫か。確かに、あの御方は何か人を惹きつけるものがある」

「……」

ライオネルが横を見た。何か騒がしい。シーグムンドも見る。

「なんじゃ。あれはスイートピーじゃないか」

廊下の先ではスイートピーがロアと何やら言い合っていた。シーグムンドとライオネルが二  
人の元に歩いていく。

「貴方！これはどうしたんです？」

スイートピーがロアの持っている白いバラを指さす。

「ああ、これ？これは城の中庭に咲いてただけど？」

「咲いてったって……そこはユング国王陛下しか立ち入れない場所ですよ！どうやって入ったんですか！」

スイートピーが言う。白いバラは魔法を使って育てられた特殊なバラだった。非常に貴重品で、世界中でもこの城の中庭の特定の場所にしか咲いてないはずだった。でそこはユング王専用の中庭だった。

「壁よじ登って勝手に入った」

ロアが何でもないことのように言う。

「非常識です！まったく……警備兵は何をしていたんだか……」

スイートピーが頭を押さえる。

「まあまあ。たかがバラ一本ぐらい、いいではないか」

シーグムンドが苦笑してスイートピーに言う。

「それはそうですね。勝手に入ったと言うことが問題なんです」

スイートピーが眼鏡を指で押し上げて言った。

「連れが迷惑をかけたように、申し訳ない」

ライオネルが静かに頭を下げた。

「……まあ、取ってしまったものは仕方ありません。これからはちゃんと許可を取ってから入ってください」

スイートピーが疲れたように言った。



「サンキュー、眼鏡の姉ちゃん」

そう言うのとロアは走っていった。

「わはは、変わった同行者がいるのお。確かにあんなのがいればお主の性格も少しは明るくなるというもんだ」

シーグムンドが笑ってライオネルに言った。

エレインはサンダルクから提供されている部屋で机に向って手紙を書いていた。羽ペンが優雅な文字を羊皮紙の上に描いていく。やがて書き終えると封筒に入れ蠟で封印した。

「できたわ。これお願い。あのスイートピーとかいう方に渡しておけばいいでしょう」

部屋の奥に控えていたライオネルがエレインから手紙を受け取る。アヴァロン王への兵の要請をしたためた手紙だった。

「いえ、これは私が直接持つていこうかと思っております」

「なぜ？ ユング王に早馬を頼めばよろしいじゃない。それに貴方が側にいないと何かと困るわ」

エレインが怪訝そうな顔で聞く。

「エレイン様の前でこのようなこと申したくはありませんが、レオデグランスにも自分の利益のために国を売るようなはいます。誰とは申しませんが……その様な輩に手紙が渡ると陛下の手に渡るまでに握り潰される可能性もあります。ここにいればエレイン様の身に危険はありま

せんし、私が直接行った方が確實です」

ライオネルが言う。その言葉を聞いてエレインが顔をしかめた。まずエレインの脳裏に浮かんだのはオクト大臣だった。今は無きエレインの母の兄で、エレインにとっては叔父に当る人物である。エレインはこの叔父が大嫌いだった。アヴァロン王の側近でありながら国を憂いず私利私欲のことしか頭にならない男だった。確かにあの男なら他国に兵を送るなどしそうにもない。「……そうね。お願いするわ。くれぐれも気をつけてね」

「はい。お任せください。必ずや援兵を連れて戻ってまいります。エレイン様も御体に御気をつけて」

そう言うときライオネルは一礼してエレインの部屋を下がった。

ロアがリユネットの部屋に行く。部屋には医者らしき男とベットに横たわっているリユネットがいた。ロアの入ってきた音を聞いてリユネットは顔を向ける。見るからにやつれている。もとから白かった肌は今ほもう透き通るようで生気が感じられなかった。

「……何よ、暗い顔して……あなたに同情されるほど私は落ちてないわよ」

ロアを見てリユネットが弱々しく微笑する。その微笑には死の影が纏わりついていた。「あはは、暗い顔なんてしてないよ。それよりこれ見てみるよ」

ロアは大きな身振りで手を振る。何処から取り出したのか、いつの間にかロアの手に一本の白いバラが握られていた。

「な、白いバラなんて珍しいだろ。さっきここの庭から一本頂戴してきたんだ。さすが魔法国家サンダルク、変わったものがあるなあ」

ロアが笑顔でそう言うと、部屋にあったガラスの花瓶にバラを挿した。

「綺麗だろ？これ見てお前も元氣出せよ。なーに、すぐ良くなるさ」

「……」

ロアが笑いかける。リユネットは黙ってしばらくバラを見つめていたが、やがて悲しげに目を閉じた。いつものあの破壊的な元氣は欠片も無かった。自分の死期を悟っているのだろう。

ロアにももう掛ける言葉は無かった。部屋に残っていた医者がロアを部屋の外に連れ出した。「残念ながら、もう手の施しようがありません。食事もほとんど口にせず、体力も落ちていく一方で……おそらく後数週間の命でしょう。それか……」

医者が言い渡す。吸血鬼のロアを前にして吸血鬼になるとは言い難いのだろう。

「申し訳ありません……吸血鬼に噛まれた物の治療法はまだほとんど不可能と言われていました。それがあのボールスに噛まれたとなれば……」

医者が無念そうに肩を落とす。いい医者のようにロアには思えた。

「ああ、わざわざありがとう。あなたのせいじゃないよ」

ロアが言う。

「……はい。では私はこれで……リユネット殿の御容態に変化がありましたらすぐにお呼び下さい。最後まで最善を尽くします」

そう言って医者は去っていった。その後を見送るロアの顔にある決意の色が見える。ロアがリユネットの部屋に戻った。リユネットは目を閉じて眠っているように見える。

「あのさ、これやるよ」

ロアが首から銀のネックレスを外してリユネットの胸に置いた。イーリアスの紋章を象ったネックレスだった。

「それ、昔ある女の子にもらったものなんだ。お守りだって。今までいろんな危険な事があつたけど、その御陰で何とか生きてこれた気がする」

ロアが言う、リユネットは目を閉じたまま答えない。

「……じゃあな」

ロアは静かにそう言うと、部屋を出て行った。

リユネットが目を開ける。弱々しい手で胸に置かれたネックレスを掴んだ。

「……馬鹿、私があげたんじゃない……」

リユネットが首を横に向けて、窓際に置かれた白いバラを見た。朝の淡い光を浴びたそのバラは、悲しくなるほど美しかった。

ライオネルがユング王から借り受けた馬を引いて城門まで歩いて来た。見送りに出たアッド、メルフィナ、ネックコを振り返る。

「では行って来る。くれぐれもエレイン様のことをよろしく頼む」

ライオネルが頭を下げる。

「ええ、エレイン様は任せておいてください」

メルフィナが言う。

ライオネルは頷くと馬に飛び乗り、風のように駆けていった。見る見る間に姿が小さくなる。やがては見えなくなった。

「大丈夫でしょうか。最近はこの辺もモンスターが多いと聞きます……それに大森林も抜けなければなりませんし……」

メルフィナが心配そうに言う。

「大丈夫だろ。あの男に限ってその辺のモンスターにやられるなんてことはないよ。それよりいつもエレイン姫にぴったりくっついてるあいつが、エレイン姫から離れるなんて驚きだよ」

ネツコが言う。

「……それだけ我々の事を信頼しているのだろう」

アッドがライオネルの消えた方角を見つめて言った。

「ふーん、そうかな。それよりロアの奴は何処に行ったんだ？」

「そういえばロアの姿だけが無かった。」

「そうですよ。ライオネル殿の見送りなのに」

メルフィナが残念そうに言う。

「……探したんだがな、何処にもいなかった」

「何処行ったんだ、あの馬鹿」

ネッコが呟いた。

荷物を提げたロアが城の裏門から外に向って歩いていった。

吸血鬼に噛まれたリユネットを治療する方法は無い。だが、もしあるとすればそれは吸血鬼を作った男、ポールスだけが知っているはずだった。ポールスが死んだ今、そのヒントを探しにポールスの居城ネグロードに行くしかなかった。ネッコ達には言っていない。危険すぎるからだ。幾ら軍隊のような大勢ではないとはいえ、魔界の地に一步足を踏み入れればどのような敵が襲ってくるかわからない。おまけに主が不在とはいえ、十三使徒の居城に潜入するのだ。楽天的なロアでさえ、万に一つも自分が生きて帰ってこれると思わなかった。

いつしか町の外に出る。そのロアの前に白馬を引いた一人の女性が立ちはだかった。リユネットだった。青白い顔をして馬の手綱に寄りかかるように立っている。

リユネットがロアを睨む。

「な、なんでお前がこんなところにいるんだよ」

ロアがたじろいで言う。

「お前とは何年の付き合いだと思ってるんだ。貴様の考えている事ぐらいわかる。どうせ私のためにネグロードまで行くつもりなんだろう」

苦しそうに喋るリュネット。

「う……」

おもいっきり考えを読まれているロア。単細胞な脳みそだから読みやすいんだろう。

「言っただろう、私はお前に同情されるぐらいなら死んだほうが良かったですな。貴様がネグロードに行くと言うなら、私も行って自分で治療法を探す」

リュネットが断固とした口調で言う。そしてリュネットがポケットから先ほどロアから貰った銀のネックレスを取り出した。

「それとこれは返すぞ。そんなに大事なものなら自分でしっかり持つてる。その紋章にはその女の子の願いが込められているんだ。お前が無事でいますようにってな。だから私が持っているても何の意味も無い」

リュネットが怒ったような口調でそう言うと、ロアにネックレスを投げ返した。ロアが片手で受け取る。

「なあ、その馬何処から持ってきたんだ？」

ロアがリュネットの曳いている馬を見る。一点の曇りも無い見事な白馬だった。体格も堂々として美しい。確かりュネットはこのサンダルクに来る時はエーデルリッターに借りた葦毛の馬に乗っていたはずだが。

「ああ、前の葦毛は毛並みが美しくなかったからな。おまけに貧弱で頼りない。仕方ないからこの馬小屋から一頭貰っただけだ。この馬は中々美しくして気に入ってな」

「あ、そう。それならいいんだけど」

ロアが言う。ロアは知る由も無い。今頃スイートピーの元に『馬丁が殴られ、気絶している間にユング王の愛馬が一頭盗まれました』という報告がなされ、スイートピーが『なんでこんなに非常識な奴ばかりなんです』と大空に向って叫んだことを。

「ではそろそろ出発するぞ」

リユネットがそう言うのと、馬に乗ろうとした。しかし、リユネットの弱った体では上手く馬に乗ることすらできない。息を切らしながら悪戦苦闘していた。

「なあ、お前がその体で旅するのは無理だって。俺が行ってくるから、お前はこの城で養生してろよ」

そんなリユネットを見つめながらロアがなだめるように言う。その言葉を聞いてリユネットが激昂する。

「五月蠅いっ！そんなに私と一緒に行くのが嫌なら、私一人で勝手に行く！貴様はついて来んな！」

リユネットはそう怒鳴るとなんとか白馬によじ登り、猛然と馬を走らせて行った。リユネットは馬の背から振り落とされそうになりながらも凄いスピードで駆けていく。

「お、おい！」

ロアは慌ててリユネットの後を走って追っていった。



エレインがロアの部屋のドアをノックする、もちろん返事は無かった。仕方なくドアをかってに開ける。

「ロア、みんなが探してますよ」

エレインが部屋の中を覗き込んで言う。やっぱりロアの姿は無かった。

「まったく、何処に行ったんでしょう……」

男性の部屋に勝手に入るということに少し後ろめたさを感じながらも、エレインが部屋の中に入っていく。

「あら、これは何かしら？」

エレインが机の上に一枚の紙切れをみつける。そこには子供が書いたような汚い字でこう書かれてあった。

『ちよつち魔界まで行って来る たぶんいつか帰る バイ ロア』

「何考えてるのかしら……」

エレインが呆れて呟いた。

——古城カムナギムト。

メレアガンスの言葉を聞き、驚きを隠しきれないネヴィーナはその長い髪を指先で弄びながら、トゥオンの目覚めを待っていた。

メレアガンスは、最終決戦の場にヴェネルクスがいなかったことしか知らず、トゥオンの目覚めを待つことになったためであった。

二人は言葉もなく待ち続け、半日ほどが経過した後、とうとうトゥオンが意識を取り戻した。「……ここは？」

瞳を開き、あたりを見回しながら、状況を掴もうとするトゥオン。

その瞳にメレアガンスが映り、安堵の表情を浮かべる。

「メレアガンス……助けてくれ……！」

メレアガンスにかけようとした言葉は、ネヴィーナに気がついた驚きによって遮られた。

「ネヴィーナ!?なぜここにいる……！」

そう声を上げ思わず身を起こそうとする。

しかし、全身を襲った苦痛によって、その行動は拒否される。

「ご挨拶ね、ここにメレアガンスがいるのは私のおかげなのよ」

再び横になったトゥオンに声をかける。先ほどのまでの驚愕を隠した振る舞いであったことは、メレアガンスにははつきりと理解できた。

「そうだとゥオン。ネヴィーナがいなければ、私は君を見つけることはできなかった。何が起こったんだ？」

トゥオンの横に腰をかけ、そう言葉を投げかける。

「……わからない。前線にモードレットが出撃していて、奴と相対したことまでは覚えているのだが……」

トゥオンはメレアガンスに偽りを述べた。正確には、敗北したところまでは覚えていた。しかし、そこからの記憶はなかった。あのモードレットがああ状況で自分を撃ち漏らすことなど考えにくい。いったい何が起こったのかトゥオン本人もわからないことであった。

「話こんでいるところを悪いけど、メレアガンス、私の用件を先にお願いできかないかしら？」

二人が思案の表情を浮かべている中、沈黙していたネヴィーナが声を上げた。

「用件？」

トゥオンはそう不思議な顔をしてメレアガンスに顔を向けた。

「そうだったな。トゥオン、ネヴィーナが君に聞きたいことがあるそうだ」

そうトゥオンにいい、メレアガンスはネヴィーナに顔を向けた。

「聞きたいこと？」

「ええ、ヴェネルクス・ガルガンデイのことで、貴方に聞きたいことがあるの」

トゥオンは、その名を聞くのは久方ぶりであった。

「ヴェネルクスがどうかしたのか？ 確か行方不明だったはずだが？」

そう呟くトゥオン。

「ええ、彼はまだ行方不明よ。聞きたいことはそんなことじゃなくて、魔王モート様とアトロの最終決戦の話なの」

モートの名を聞いた瞬間、微かにトゥオンに苦しい表情が浮かぶ。

「その決戦において聞きたいことはなんだ？」

一瞬の表情の変化を隠し、平静を装って問い返す。

「彼は、ヴェネルクスは最終決戦にはいなかったの？」

ネヴィーナは包み隠さず率直に質問を投げかけた。

しばしの思案、その沈黙の後、

「ああ、確かにヴェネルクスはあの決戦にはいなかった」

そう簡潔に述べた。

「なぜ？」

すぐさま問い返すネヴィーナ。

「奴は、その前にアトロと戦い、行方不明になったのだ。モート様の命令で作戦中だったか、アトロ一行と遭遇し、敗北したとモードレットから聞いたな」

最後のモードレットの名をはき捨てるようにそう言った。

「まさか……」

その様子を隠すことも忘れ、ネヴィーナは驚愕していた。

「ただ、死にはしていないはずだ。死ねば我等にはわかるはずだ。それに、彼はモート様の腹心と言えるほどモート様は信頼していなすった。彼が死ねば、モート様もなんらかの反応を示していたはずだ」

「ええ、そうね……」

あいづちは打つが、ネヴィーナは上の空であった。長い間探していたヴェネルクスの手がかりは全くなくなったのだ。その絶望にも似た気持ちに支配されていた。

「ヴェネルクスを倒していたとなると、アトロの力はかなり侮れなかったということだな」  
メレアガンズはそう付け加えた。

その言葉を最後に、ネヴィーナは一言も言わずに二人の元から壁に溶け込むように消え去ったのだった。

——サンダルク城。

時は遡り、ロアが城を立つ半日ほど前。

「アヴァウッド、アヴァウッド・キャメロンと申しましたね？」

与えられた宿舎の廊下でアッド背後からいきなり声をかけられた。振り返ると、そこにはエレインが立っていた。

「……なにか？」

そう短く問い返す。

「ええ、あなた剣をお使いになるのでしょう？」

エレインがアッドの腰に帯びている長剣を眺めながらそう問いかける。

首を立てに振ることで返答とするアッド。

「ライオネルがレオデグランスに立ったことは知っていますね？」

「……話には」

アッドは遠まわしだなと感じていた。

「そこで、貴方には私の剣の稽古に付き合ってもらいます」

「!？」

決定事項だと言わんばかりにエレインは言い切った。

アッドの驚きも無理もなかった。このような横暴な振る舞いを受けたことはなかったからだ。

「さあ、いきますよ」

そう言って、エレインはアッドの手を引きズンズンと歩き出した。

「ちよっ、待って。なぜオレなんだ？」

アッドは珍しく焦ってそう声を上げた。

「貴方しか手ごろな人がいないの。ロットは私に剣を振るうわけにはいかないと言って聞かないし、コーディネリアはエーデルリッターのことで忙しいしですしね。貴方は暇でしょう？」

振り返りも、歩みも止めずにエレインはそう言いきった。

アッドは絶句する。確かにすることも特になかったのが大きな要因であっただろう。

その後、アッドは無理やりエレインの剣の稽古に付き合うことになったのであった。

エレインと剣を交えて、その剣の腕に感心したのは数時間後の話である。

剣の稽古に付き合ったあと、アッドはロアが旅立ったこと知らされる。エレインがロア探しに付き合っただけ宿舎を散策し、置手紙と思しきものを見つけた後、エレインに出会ったのだ。

「そうか、奴は出かけたか」

そう苦笑をしながら呟いた。

エレインが不思議そうにアッドを見る。

「……では、オレも行くとしようか」

アッドはそう微かに呟き、エレインの前を立ち去ったのであった。

——ミルチア第一城内部。

「アルテオム様、お待ちください！」

大臣達が息を荒立てながらアルテオムに駆け寄る。

「いくらなんでも、一国の王が国をあけるなどなつてはいけません。どうか、王は国にお留まりください」

「私が出なければ誰が指揮を執るのだ？」

「し、しかし、あの橋を渡っていくなど自殺行為ですぞ」

「フ……それについては心配はいらん。これを見ろ」

アルテオムはそう言って、壁にあるスイッチを押す。すると、前方の巨大な扉が音を立てて開きだした。扉が開いた先には、巨大な船が一艘佇んでいた。

「船？待ってください！海はもっと危険ですぞ」

「この船はただの船ではない。数十箇所に取り付けられたプロペラの回転により、空を飛行できる巨船なのだ」



「空を……!?!」

大臣達はあいた口が塞がらなかつた。いつの間にこんなものを……と。

「更に飛行できる装甲蟲も数体積載してある。どんな強国であろうと、空からの攻撃にはひとたまりもあるまい」

「しかし、それであってもですね……」

大臣達がアルテオムに迫っていると、一人の男がゆっくりと歩いてくる。

「では、俺が指揮を執り、サンダルークを落として見せましょう」

「ん……貴様は？」

「俺はエフラムといます。以後お見知りおきを」

そう言つて、エフラムは丁寧な礼をする。

「ふむ……だがエフラムよ。私は貴様を信用できん。初対面の上、こんな大事なものを任せるといふのだからな。私を信用させる何かがあるのかな？」

「初対面で信用と言うのも難しいですね。それには普段知っている者が信頼を勝ち取るよりも数段に難しい事だ。むしろ、不可能と言つても過言ではないくらいに……」

「何が言いたいのかね？」

「信頼とは行動で示し、勝ち取るものです。見事、サンダルークを落とす、あなたの信頼を勝ち取ってみましょう」

「……フフ、面白い男だ。もし失敗したらどうするつもりだ？」

「失敗はありません。俺は勝ち目のない戦いはしない」

アルテオムが睨む眼差しを、睨み返さんとまでに鋭い眼差しでエフラムはそう言い放った。  
「フフ……本当に面白い男だな。いいだろう、貴様に任せる」

「お任せください。では、さっそく準備に取り掛かるとしましょう」

——サンダルク城。

（はあ……ロア君の勝手振りには困ったものね……それに、リユネットやアッドさんの姿も見当たらないし、アムリタまで……）

そんなことを思いながら、ツカツカと廊下を歩いていくメルフィナ。

「あら、メルフィナ。そんな深刻な顔をして、どうしたの？」

前から来たエレインが、メルフィナに声を掛ける。

「いえ、ちょっと色々と……」

「ロア達のことですか？」

「え、ええ。まあ、彼のことですから、無事に帰ってくると思いますけど……」

そう言いながらも、メルフィナの脳裏に一抹の不安がよぎる。

（経緯から見て、ロア君が向かったのはネクロード。ボールスとラウドが共に行動していたところから見て、問題があるとすればネクロードにラウドがいた場合……）

「ねえメルフィナ」

「は、はい」

いきなり声を掛けられ、少し声が上ずるメルフィナ。

「コーデリアさんてすごいですね。女性なのに、ブラックナイツの隊長としてやってきて、今ではエーデルリッターすべての人が、彼女を信頼して、ついてきている」

「そうですね。でも、それは決して楽なことではない。行動、態度で示し、皆の信頼を勝ち取るのはそう容易なことではありませんからね。でも、急にどうしたんですか？」

「アヴァロンの王位を継ぐものは私しかいません。でも、こんな時代、ぬくぬくと王座に座っているだけの王に、民衆はついてくるでしょうか？ましてや、私は女です。だから、アトロの血を継ぐ者としてという傍ら、行動で民衆の信頼を勝ち取ろうと思っています。だから、私もコーデリアさんのようになりたいと思ったから……」

「エレイン様、それは間違いではないですよ。ただ、勇気と無茶を吐き違えないように……魔王を倒し、生きて帰ってこそ、民衆はエレイン様を敬んででしょう。死んでしまつてはすべてそこで終わつてしまいますから」

「そうですね……」

エレインは、ゆっくりと窓の外を見た。雲ひとつない星空をじっと見つめた。

「今の話、ライオネルやみんなには秘密ですよ」

「フフ、わかつてますよ」

あたりも静まり返った夜更け、ロットは一人、テラスで佇んでいた。

「ロット殿……?」

ロットの後ろで声がある。ロットが振り返ると、そこにはコーディリアが立っていた。

「どうしたのです?こんな夜更けに」

「いや、少し眠れなくて……」

「……そうですか。隣、いいかしら?」

「え、ええ、どうぞ」

ロットがそう言うと、コーディリアはロットの隣に腰をおろす。鎧を着ていないコーディリアのいつもと違う雰囲気、少し見惚れてしまうロット。

「まだ気にしてるのですか?」

「はい……偶然とは言え、汚名を着せられたわけですから……」

「でも、あまり気にしないほうがいいわ」

「そうですね……私にもっと力があれば……」

そう言いながら、自分の拳を見つめるロット。

「英雄騎士ロット」

「よしてください、私は英雄などではないんです」

「いえ、あなたは英雄です。どんなに強くても、どんなに戦場で敵を打ち取っても、英雄と呼

ばれるわけではない。あなたが英雄騎士と呼ばれるのには、貴方の人間性、力、実績、行動、態度のすべてが重なり合ったもの。あなたしか呼ばれることはないわ」

コーデリアの言葉に、黙り込むロット。

「そうね……あなたはもう少し自分に自信を持つことです」

「自信……ですか？」

「そう、自信です。適材適所という言葉があります。人には、それぞれ自分ができることの限界というものがあるのです。そこで、自分の力を出し切れば、自信はおのずとついてくるもの……」

「私にできること……ですか」

「そう。だから、明日言おうと思っていたのだけれど、今言いますね。貴方にしかできないこととです」

その言葉に、唾を飲むロット。

「それは……？」

「あなたにブラックナイトの隊長をお願いしたいのです」

「え……？わ、私がブラックナイトの隊長？」

驚き、聞き返すロット。

「私の部下に三人候補がいるのですが……二人は私についてもらっていたい。それと、もう一人はまだ若いんです。彼に隊長は少し荷が重過ぎると思ったから……」

「待ってください。私にも荷が重過ぎます。それに、コーデリア殿はどうするおつもりですか？」

「私はブラックナイトだけでなく、エーデルリッター全体を指揮しなければなりません。全体の指揮と、一つの隊の指揮を同時に取るのは容易ではありません。そのために、各部隊に隊長というものが存在しているのですよ」

そう言って、コーデリアはロットに微笑みかける。

「あなたは英雄騎士と呼ばれるくらい何か、人々の心を惹くものをもっている。大丈夫、あなたならやれます」

コーデリアが強く言う。ロットは黙って考え込んでいた。

「明日の朝、返事を頂きます。是非、お願いしますね」

そう言って、コーデリアは立ち上がり、奥へと歩いていった。

（私にできるだろうか？だが、このまま何もせずに行けば、悪い方へと傾くばかりだ。そうならば、私についてきてくれた二人に申し訳が立たない。やはり、やるべきなのだろうか…

…？）

ロットはしばらく、その場で同じことを何度も考えていた。

第四章  
完